附属学校国際教育推進委員会報告書（第 14 集）

～ 2022 年度～

附属学校群の国際教育の推進

2023 年 3 月

筑波大学附属学校教育局

附属学校国際教育推進委員会

目　次

1．はじめに

筑波大学附属学校群における国際教育実践研究

副学長・附属学校教育局教育長　溝上智恵子 …… 3

2．附属学校の国際教育 …… 4

3．共通コンセプトに基づく附属学校の国際教育の取り組み等 …… 6

4．各附属学校の国際教育活動

⑴　先進的教育技術交流及び児童の主体的な国際交流を目指して

（附属小学校）…… 10

⑵　コロナ禍における国際教育活動

（附属中学校）…… 12

⑶　2022 年度の国際交流の報告

（附属高等学校）…… 16

⑷　2022 年度国際交流プログラムにおける生徒のオンライン交流での活躍

（附属駒場中・高等学校）…… 20

⑸　次の 5 年を、国を越え支えあいながら

（附属坂戸高等学校）…… 26

⑹　視覚障害教育におけるグラスルーツの国際交流

（附属視覚特別支援学校）…… 31

⑺　音声、文字、手話、非言語をフル活用！異文化コミュニケーション

（附属聴覚特別支援学校）…… 38

⑻　附属大塚特別支援学校における国際教育の取り組み

（附属大塚特別支援学校）…… 44

⑼　国際教育の火を絶やさぬよう、校内で活動を続けた

（附属桐が丘特別支援学校）…… 48

⑽　附属久里浜特別支援学校の国際交流

（附属久里浜特別支援学校）…… 52

５．各附属学校のイングリッシュルーム活動
⑴　子どもたちの充実した国際理解教育に向けて
（附属小学校）…… 56
⑵　附属中学校　イングリッシュルームの活用報告
（附属中学校）…… 59
⑶　附属学校のイングリッシュルーム活動について
（附属高等学校）…… 60
⑷　日常活動および海外研究発表とその先の支援
（附属駒場中・高等学校）…… 61
⑸　生徒が自主性を持って活動できるイングリッシュルームを目指して
（附属坂戸高等学校）…… 62
⑹　附属視覚特別支援学校のイングリッシュルーム活動
（附属視覚特別支援学校）…… 63
⑺「わかった、伝わった、楽しい」イングリッシュルームを目指して
（附属聴覚特別支援学校）…… 66
⑻　英語を学ぶ・発信するモチベーションを段階的に育むイングリッシュルーム
（附属桐が丘特別支援学校）…… 68
６．おわりに
ウィズコロナで深めた本学附属学校の国際教育を振り返って
附属学校国際教育推進委員会委員長　梶山正明 …… 73
（資料）附属学校の国際交流協定締結状況 …… 74
報告書発行の記録 …… 80
委員会名簿 …… 81

1. はじめに
筑波大学附属学校群における国際教育実践研究

副学長・附属学校教育局教育長　溝上　智恵子

2022 年度も引き続き COVID-19 感染は増減を繰り返したが、政府・大学による渡航規制の緩和等もあり、附属坂戸高等学校などで、生徒の海外研修や教員の海外派遣や受入れ研修が一部再開された。他の附属学校においても、この間の経験を生かし、様々に工夫を凝らしたオンライン交流が引き続き進められている。このような状況下における各校の実践研究の詳細をお届けし情報共有を図るために、附属学校国際教育推進委員会報告書第 14 集を刊行することとした。

まず、昨年度で終了した文部科学省による WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業は、附属坂戸高等学校を拠点に、附属高等学校、附属駒場高等学校ならびに特別支援学校の高等部も加わり、本学大学教員のリソースを活用した高大連携を果たしながら、国際教育・グローバル人材育成の探究型カリキュラム開発に取り組んできた。この取組みを通じて、国内外の高校や大学ならびに東南アジア教育大臣機構等とも連携する大規模なネットワークを構築することができた。附属坂戸高等学校では、当該事業の指定終了後も、国内外でのフィールドワークや ESD シンポジウム等を通して、生徒たちが学びと交流を進めている。

また、附属学校教育局は、引き続き WWL コンソーシアム構築支援事業の幹事管理機関を受託しており、WWL 事業によるグローバル人材育成の全国展開において重責を果たしている。7 月 1 日には連絡協議会をオンラインで開催し、12 月 18 日には全国高校生フォーラムを同じくオンラインで開催した。参加各校の高校生は、日頃取り組んでいるグローバルな社会課題の解決や提案等を話し合うとともに、事前に提出した発表資料をもとに英語でのプレゼンテーションを行って、審査委員から講評を得ることができ、生徒にとって大変貴重な経験となった。

さて、今年度から開始された第 4 期中期計画・中期目標（2022 ～ 2027 年度）において、筑波大学附属学校群は、以下のような国際教育およびグローバル人材育成に関する実践研究の実施を掲げている。

> 【中期計画 23】大学と連携し、研究に基いた学校教育の先端化を進めることにより、高大接続の新たなモデルをつくる。
> （評価指標 38）大学との連携体制強化のための先取り履修・単位認定システムを令和 9 年度（2027 年度）までに構築する（オンラインによる履修を含む）。

この中期計画の達成に向けて、2022 年度募集の WWL 新規事業「個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業」に対して、附属学校教育局が中心となって、構想名「持続可能な国際社会を創る人材育成のためのオンライン先取り履修システムの構築」事業を申請し、採択された。今後は、附属学校教育局と大学・附属学校が連携して事業を推進する予定である。

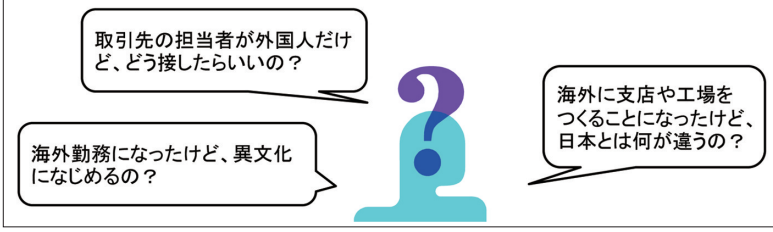
本学附属学校群には３つの拠点構想に基づく実践研究があり、そのうちのひとつが「国際教育拠点」である（他の２つは「先導的教育拠点」「教師教育拠点」）。自国や他国の文化を理解し、大切にする態度を養い、積極的に外国の人とコミュニケーションを取る態度を養うことを目指して、第４期中期計画を遂行していきたい。

2. 附属学校の国際教育

国際教育の推進の必要性

なぜ、国際教育は必要なのか？

「ヒト」や「情報」が国境を越えて高速移動している。このため、国際化に対応した能力は、一部の人だけではなく、**誰にでも必要な能力**となってきている。このような社会の中で活躍できる人材を育成することが附属学校の使命。



グローバル社会で求められる能力とは？

例えば、異なる国や文化の人々と臆せず積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度や、相手の文化的・社会的背景を踏まえた上で、相手の意図や考えを的確に理解し、自らの考えに理由や根拠を付け加えて、論理的に説明したり、議論の中で反論したり相手を説得したりできる能力などがあげられる。

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力
要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感、使命感
要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

国際社会における筑波大学の使命

●21世紀において国際社会へ向けて果たすべき本学の役割は，
(1)高い研究レベルに裏打ちされた「知の蓄積と発信」
(2)国際的リーダーとなる人材の輩出
(3)国際的な連携の構築
であると考える。

●筑波大学は，急速にグローバル化が進む世界情勢のなかで，世界をリードする研究型大学としての使命を果たすために，未来を切り拓く知の創造を通じて，地球規模課題に対する解決策を提示することを目指す。

附属学校における取組

「国際化対応能力を培う国際教育拠点」をかかげ、各校の特色を生かした国際教育を推進

国際化対応能力を培う

国際教育拠点

附属の共通コンセプト

●幼児・児童・生徒が、個々の発達に応じて、自国や他国の文化を理解し、大切にする態度を養うとともに、積極的に外国の人とコミュニケーションをとる態度を養う。
●教師が、自国の文化とともに他国の文化を尊重しながら、学校全体の国際化を図り、附属として日本や世界のために出来ることを考える。

各校の特色を生かした人材育成

【小中高】

小中高での全人教育を通して、世界をも視野に入れた多様な社会で活躍できるように、確かな教科教育、多彩な学校行事や児童生徒の諸活動に裏打ちされた自主的・自律的・自由な人材を育成する。

【駒場】

トップリーダー育成の一助として国際感覚を涵養するためのプログラム開発・研究を行い、将来国際貢献できる人材育成を図る。

【坂戸】

総合学科ならではの多角的な国際教育を通し、持続発展可能な社会の実現に向け、地球的課題に対し主体的に考察・行動できる人材を育成する。

【視覚】

国際交流等により国際性を身に付けた人材を育成する。

【聴覚】

国際交流でのコミュニケーションを通し、異文化を理解する人材を育成する。また日本語のみならず、海外の言葉にも興味・関心持つ人材を育成する。

【大塚】

外国の人と共に活動し、仲良く楽しむことができる。外国の人とのふれあいを通してスムーズに交流できる。

【桐が丘】

国際交流の経験を糧に、国際的視野で物事を捉えようとする姿勢と、積極的に自己発信しようとする意欲のある児童・生徒を育成する。

【久里浜】

子どもの興味関心に応じた触れあいから、外国や外国人について親しみを持ち、相手を知ろうとする気持ちを育む。

3. 共通コンセプトに基づく 附属学校の国際教育の取り組み等

		小学校	中学校	高校	駒場中・高校	坂戸高校
共通コンセプト		幼児・児童・生徒が、個々の発達に応じて、自国や他国の文化を理解し、大切にする態度を養うとともに、積極的に教師が、自国の文化とともに他国の文化を尊重しながら、学校全体の国際化を図り、附属として日本や世界のために				
各校の国際教育の目標（国際教育を通じて育成する生徒像）		各校の特色を生かし 小中高での全人教育を通して、世界をも視野に入れた多様な社会で活躍できるように、確かな教科教育、多彩な学校行事や児童生徒の諸活動に裏打ちされた自主的・自律的・自由な人材を育成する。			トップリーダー育成の一助として国際感覚を涵養するためのプログラム開発・研究を行い、将来国際貢献できる人材育成を図る。	総合学科ならではの多角的な国際教育を通じ、持続可能な社会の実現に向け、地球的課題に対し、主体的に考察・行動できる人材を育成する。
（国際教育を通じて広がる教師力）		・諸外国の児童・生徒の実態、教育事情を実際に体験することで，世界に誇ることができる日本の教育の特色（長・短を含む）を再認識することができる。 ・プレゼンテーション能力を向上することができる。	・現地の授業・生活を直接体験することで，教師に求められる指導力や指導の方法が国によって異なったり，国を越えて共通していたりたりすることを理解する。又教師自身が他国との交流を通じて国際社会の現状の一端を実感する。	・教師の語学力向上を図るとともに、他国の文化を尊重できる国際的な感覚を身に付ける。 ・日本の文化を他国の人々に紹介できるスキルを高める。	・教師の語学力を高めるのみならず、海外との交流を通じて異文化理解を深める。	・教科の枠を超えた協働により、教師それぞれが持つ知見を活かしながら、地球的課題を意識した教育を行う力を身につける。
（国際貢献）		・国内へ発信している教育成果を海外教育技術支援へ活用。	・国内各地へ発信している教育技術や、教師教育の成果を海外の先生方とも共有する。	・国内へ発信している教育成果を、海外へも発信する。	・海外、とりわけアジア諸国の学校の生徒と研究発表を行うことでお互い切磋琢磨することができる。同時に文化的な交流をし、お互いの理解に貢献する。	・本校との協働を通し、アジアの各校に対して本校とともに持続発展可能な社会のあり方について考える機会を与える。
取組（令和４年度）	幼児児童生徒	・筑波大学外国人留学生との交流会 ・オーストラリア、ベルビューパークステートスクール校との英語、日本語による児童交流（ビデオレターの交換、手紙やカードの交換）	・アメリカ短期留学（West-mont Christian Academy）に37名が参加（3月） ・アゼルバイジャン、バクー・ヨーロッパ・リセ校とのオンライン交流会（3月）	・国際学術シンポジウム（韓国）に生徒3名がオンライン参加 ・プリンスエドワードアイランド大学へ英語研修に生徒13名がオンライン参加 ・国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム（ドイツ開催）に生徒1名を派遣 ・SGH全国高校生フォーラムに生徒2名がオンライン参加参加 ・シンガポール、ホアチョン校とのオンライン交流会に生徒11名が参加	・台中一中とのオンライン・ブレイクアウトルーム交流 2023年3月10日（金） ・台中一中とのオンライン研究交流 2023年3月17日（金） （高1・10名、高2・3名） 理数を中心とした研究発表交流 ・タイ国際科学フェア2023（TISF）、2023年2月12-17日 （Mahidol Wittayanusorn School, Thailand）（1名） ・釜山国際高校、オンライン交流1 2022年7月11日（高校生43名） ・釜山国際高校、オンライン交流2 12月19日（中3・3名、高1・13名）発表活動・文化交流他	・アジア学院研修プログラムに11名の生徒が参加 ・オーストラリア夏季研修プログラム@メルボルン、シドニーに生徒19名が参加 ・台湾から1年間、留学生を1名受入 ・タイ・カセサート大学附属カンペンセン校生徒59名受け入れ ・AIMS留学生38名と交流 ・SGH・WWL全国高校生フォーラムで本校の代表生徒が発表 ・WWL連携企業・APPJ社、インドネシアコルニタ高校、インドネシア環境林業省附属高校との連携によるSDGsオンライン学習に38名の生徒が参加 ・第11高校生国際ESDシンポジウム・The 4th SDGs Global Engagement Conference開催。本校生徒が司会・進行を行う。

視覚特別支援学校	聴覚特別支援学校	大塚特別支援学校	桐が丘特別支援学校	久里浜特別支援学校
外国の人とコミュニケーションをとる態度を養う。 出来ることを考える。				
た国際教育の取組				
国際交流により国際性を身に付けた人材を育成する。	国際交流を通して、異文化を理解したり主体的にコミュニケーション取ろうとしたりする国際的資質を身に付けた人材を育成する。	外国の人と共に活動し、仲良く楽しむことができる。 外国の人とのふれあいを通じてスムーズに交流できる。	国際交流の経験を基に国際的視野で物事を捉えようとする姿勢と、積極的に自己発信しようとする意欲。また、その実践の場を校外にも求める主体性のある児童生徒を育成する。	子どもの興味関心に応じた触れ合いから、外国や外国の人について親しみをもち、相手を知ろうとする気持ちを育む。
・外国文化の研鑽を深める機会となる。 ・国際教育を通じて、グローバルな視野、コミュニケーション能力を身につける。	・教師自身の視野を広め、語学力の向上を図る。そして聴覚障害教育の国際教育拠点の学校として、海外に発信できる力を身に付ける。	・外国文化の研鑽を深める機会となる。 ・国際教育を通じて、グローバルな視野、コミュニケーション能力を身につける。 ・日本の文化を他国の人々に紹介できるスキルを高める。	・国際教育を推進する過程を通して、他国教師らとの間に信頼関係を築き、人的ネットワークを広げていこうとする。 ・国際感覚・国際コミュニケーション能力を身につける。	・教師のコミュニケーション能力を向上させ、新しい知識や技能を身に付けるきっかけとする。
・アジア諸国の視覚障害教育発展に寄与。 ・アジア諸国の視覚障害者職業自立推進に寄与。	・聴覚障害教育における指導法や教材教具の有効活用を具体的に国外の教育現場に提供する。特にフランスやアジア諸国に発信する。	・知的障害児教育に関する指導法や教材教具の紹介。 ・海外からの研修生の受け入れおよび授業研究の協力	・我が国の肢体不自由教育が培ってきた知見・技術等を他国の教育関係機関に向けて発信する。	・自閉症児教育に関わる海外の特別支援学校関係への成果発信。
・本校に在籍する鍼灸手技療法科留学生との交流会（小学部） ・トビタテ！留学JAPANのプログラムでタイ視覚障害者支援クリスチャン財団の盲学校及び盲学校が連携するインクルーシブ教育校での留学、交流とホームスティなど　高等部生徒３名 ・フィリピンの視覚障害生徒とのオンライン交流会の実施（高等部） ・ドイツ・ハンブルグ大学からの大学院生との交流	・韓国国立ソウル聾学校とのオンライン交流（中学部７月、12月） ・フランス国立パリ聾学校とのオンライン交流（高等部普通科 11月、１月） ・第４回日台聾学校美術交流展、臺北市立啟聰學校、臺南大学附属啟聰學校と専攻科造形芸術科　作品展開催（１月20日～22日　市川市芳澤ガーデンギャラリー）	・ポルトガルのCasa da Músicaから教育プログラム　ワークショッププリーダーを招いて音楽と体の動きを主としたコミュニケーションワークショップを実施。 ・給食で世界の料理を体験（月１回程度） ・幼稚部、小学部、中学部、高等部におけるALTの教員による英語の授業の実施	・筑波大学外国人教員研修留学生１０名（大韓民国１名，リベリア１名，フィリピン１名，ウズベキスタン１名，ブラジル１名，オマーン１名，ソロモン１名，アルゼンチン１名，ナイジェリア１名，グアテマラ１名）と高等部生徒との国際交流	

		小学校	中学校	高校	駒場中・高校	坂戸高校
取組（令和４年度）	教師国際貢献含	・デンマークから授業研究教員の授業参観・意見交換会 ・算数、理科教員による北欧・英国授業交流会を現地で実施（デンマーク、リンビートーベック市との提携による授業研究会、英国ケンブリッジ附属小学校での授業、および授業研究交流会）	・北京市建華実験学校の教員の参観・意見交換会（６名来校） ・研究協議会に韓国の理科教員40名参加（一般申込にて）		・台中一中とのオンライン・ブレイクアウトルーム交流 2023年３月10日（金） ・台中一中とのオンライン研究交流 2023年３月17日（金） （高１・10名、高２・３名） →理数を中心とした研究発表交流の研究アドバイス、またオンライン交流までの先方担当者とのオンライン打合せ会議 ・タイ国際科学フェア2023（TISF）、2023年２月12-17日 （Mahidol Wittayanusorn School, Thailand）（１名） →研究発表までの指導（ポスター作製への助言など） TISF2023主催者とのオンライン上の連絡の取合いなど ・釜山国際高校、オンライン交流１ 2022年７月11日（高校生43名） ・釜山国際高校、オンライン交流２ 12月19日（中３・３名、高１・13名）発表活動・文化交流他 →オンライン交流に至るまでの先方担当者とのやり取り、参加生徒へのアドバイス、記録、アンケート作成	・ACCU教職員の国際交流を通じた国際比較研究で、タイに教員５名、インドネシアに教職員５名派遣 ・SEA-teacherパイロット事業国際教育実習生９名、派遣元大学教員３名受け入れ ・ACCU教職員の国際交流を通じた国際比較研究で、タイから４名、インドネシアから４名、フィリピンから４名各国の附属学校教員を受け入れ ・11th SEAMEO-University of Tsukuba Symposiumにおける本校教諭の発表
環境整備	現状	・ALTと自由にコミュニケーションが図れるイングリッシュルームの活用。	・英語が話せる者が常駐し、生徒が自由に活用できるイングリッシュルームの設置。	・ウェブ会議のシステム。	・高度情報化事業に伴い、Google Meet/Zoomなど利用して海外派遣先の生徒と校内残留生徒との交流を実施。	・海外附属学校と探究学習を中心とした授業開発を行っているが、単位認定や継続的な国際会議を検討中
将来構想		・英語専科教員の増員（小学１年生からの英語教育導入のため）。 ・継続的な財政的基盤を得て、渡航費・通訳費の確保をする。	・ALTとのティームティーチングを中心に、少人数での授業を展開する。	・ウェッブ会議のシステム。 ・実習生・留学生等の受け入れのための宿泊施設。 ・本校生徒の海外留学、海外からの留学生受け入れのための奨学金制度。	・海外派遣で交流の確立している相手校とオンラインを通じた研究交流また合同研究。 ・SSH以外に財政的支援を求め、海外交流をさらに活性化する。	・SEA-teacherプログラムや、アセアン各国の国際連携協定校との連携を拡大強化し、アジア版エラスムスのプロトタイプ版を提言、実現する。 ・国を越えた教職員人事交流事業の実現に向けた構想の提言を行う。

視覚特別支援学校	聴覚特別支援学校	大塚特別支援学校	桐が丘特別支援学校	久里浜特別支援学校
韓国国立特殊教育院（KNISE）４名の視察受け入れ ・タイ視覚障害者支援クリスチャン財団の盲学校及びインクルーシブ教育校授業視察 ・フィリピンの視覚障害生徒とのオンライン交流会の実施 ・ドイツ・ハンブルグ大学からの大学院生のインターン受入・授業交流及び指導法等についての意見交換	・ＪＩＣＡ委託ウズベキスタン国就学前教育におけるインクルーシブ教育実践強化プロジェクト「聴覚障害児の理解と指導」（オンライン講座）講師 ・ドイツミュンヘン大学教員の学校参観受入れ ・ＪＩＣＡ研修「インクルーシブ教育実践強化」事業南米（ボリビア、コロンビア、コスタリカなど）特別支援教育関係者７名の受入れ	・Casa da Música 教育プログラム　ワークショップリーダーとの意見交換 ・ウズベキスタン国就学全教育におけるインクルーシブ教育実践強化プロジェクトの研修講師 ・在外日本人学校への教育相談コンサルテーションの実施		・中国江蘇州省に位置する蘇州工業園区仁愛学校とのオンラインでの交流協定締結式の実施と情報交換会の実施、中国自閉症児研究会への実践事例提供、教員会の研究協議会への相互参加 ・第 19 回アジア競技大会に向けて、中国浙江省寧波市達敏学校との児童同士の交流内容の検討 ・研修の受け入れ （JICA における研修の一環で、コロンビアやボリビア、コスタリカなど南米を中心とした７カ国から研修員７名が来校）
・ウェブ会議システム	・ウェブ会議のシステム	・スカイプを活用した実践。 ・教材・教具の展示	・ウェブ会議システム。	・ウェブ会議のシステム等の整備。 ・図書館に海外絵本コーナーを設置。
・国際交流協定校への短期留学の継続及び生徒の受入 ・本校生徒の長期留学に向けた制度、基盤を作る。留学に係る奨学金等費用の確保。 ・留学生支援の充実。	・コロナ禍で中断した渡航による国際交流の再開 ・海外への教員派遣の再開 ・学外に公開できる「国際コミュニケーションルーム」の開設。 ・聴覚障害教育における海外のインクルーシブ教育の現状と課題に関する情報交換 ・アジア太平洋地域聴覚障害問題会議（APCD）及び第 21 回ろう教育国際会議等での発信	・継続的な教員の海外派遣交流視察、研修の機会の設定。	・ウェブ会議システムを活用した授業交流、情報交換を一層充実させる。 ・海外への教員派遣を拡充し、研究成果等の対外発信力を強化する。	・ウェブ会議等のシステムを利用して、定期的に授業研究会等を行う。 ・海外からの積極的な研修受け入れを行うとともに、研修の講義内容を録画編集し、国内外に向けた研修データライブラリーを整備する。

4. 各附属学校の国際教育活動

附属小学校

先進的教育技術交流及び児童の主体的な国際交流を目指して

1．本校の国際教育の特徴

筑波大学附属小学校は、国内の教育研究校としての使命、責任感をもって教育研究を進めている。その成果を活かして、海外教育技術支援、海外教育技術交流を行い、相互の教育技術の高まりをめざし、国際教育を推進している。

本年度は、昨年度同様、新型コロナの影響が続き、児童の渡航を伴った海外校との授業交流のプログラムは中止となったが、教員主体で行っているデンマーク、英国での授業交流は、2022 年 10 月に現地校での授業及び、授業協議会を行うことができた。

児童の国際教育活動は、筑波大学に在籍している留学生との交流会やオーストラリアの小学校との授業ベースの交流を通じて、グローバル人材の育成を目指す取り組みを続けている。人とのつながりを通して、異文化理解を深め、共に幸せに生きていくために相手を思いやり、関わっていこうとする主体性をもった児童を育てることを目標としている。

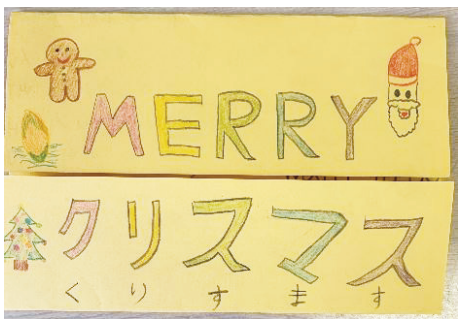
２．活動報告

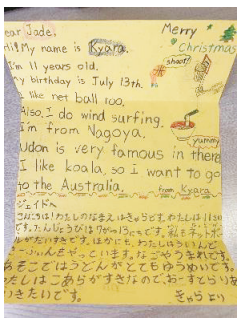
（１）海外校との授業交流

10 月 10、11 日、デンマークフメルトフテ小学校での授業及び授業研究会の実施（理科・算数）
10 月 13、14 日、イギリスケンブリッジ附属小学校での授業及び授業研究会の実施（理科・算数）

（２）児童の国際理解プログラム　オーストラリア　ベルビューパーク小学校との継続的な交流

オーストラリア、Bellevue Park State School との Tomodachi Project 交流を継続的に行い、児童が意欲的に英語を使って表現する場をつくるとともに、日本語と英語のやりとりから、お互いに学びあい、理解し合おうとする関係をつくることができた。友達紹介のビデオをクラスごとに送ったり、グリーティングカードを日本語と英語で作成して送った。





（３）児童の海外交流プログラム　ハワイ大学附属小学校交流（中止）

コロナ禍における国際教育活動

１．本校の国際教育の特徴

本校における国際教育は、国際化した社会において、地球的視野に立って、主体的に行動するために必要と考えられる態度・能力の基礎を育成するために、自己を確立し、他者を受容し共生しながら、発信し行動できる力を育成することを目標としている。

具体的な活動としては、生徒全員に門戸を開いているイングリッシュルームの活用、さらに海外における経験を積み重ねたい生徒のための短期留学、また海外からの訪問校との交流を生徒自ら企画・運営することである。

ここ数年は、新型コロナウイルス感染症の世界的拡大の影響で、国際交流に関する行事が思うように実施できない状況であった。そのような中ではあるが、昨度末の３月にはアメリカ短期留学の代替として、国内での異文化交流プログラムを３日間で実施し、国内にいる留学生と交流したり、東京グローバルゲートウェイを訪問したりして、コロナ禍であってもできることを模索しながら国際教育を推し進めた。

令和４年度は、新型コロナウイルス感染症の状況が落ち着きつつあることを鑑みてアメリカ短期留学を再開し、３月の渡航に向けて事前研修を進めた。あわせて、コロナ禍により急速に進んだオンライン化の利点を活用した企画として、アゼルバイジャンのバクー・ヨーロッパ・リセ校とのオンライン国際交流を計画することになった。時流の転換期の真っ只中にいる状況で、今後の国際交流の在り方を模索し続ける日々ではあるが、その様子も含めて、各企画の準備の経緯を以下に報告する。なお本稿の作成段階では、令和４年度における企画は両方とも未実施であることから、準備段階までの報告になることをご了承いただきたい。

２．異文化交流プログラム

令和３年度に実施を予定していたアメリカ短期留学は、新型コロナウイルス感染症の状況を鑑みて中止となった。その代替として、異文化交流プログラムが実施された。主な内容は以下の通りである。

日　程：令和４年３月 23 日（水）～ 25 日（金）
場　所：本校（桐陰会館他）、東京グローバルゲートウェイ（TGG）
対　象：２年生および３年生　合計 33 名
　　・本校生徒として責任ある行動がとれる者
　　・英語で積極的にコミュニケーションをとる意欲がある者
　　・事前研修と振り返りを含め、全てのプログラムを全うできる者
内　容：・諸外国から日本国内に留学している学生たちとの様々な活動（文化交流、ワークショップ、講義、体験学習、レッスンなど）
　　・体験型英語学習施設 TGG での英語研修

（1）１日目：３月 23 日（水）@ 桐陰会館

１日目の初めに行ったのは、６グループに分かれてのアイスブレーカーアクティビティ（Q & A）であった。初対面であるにもかかわらず、どのグループも楽しそうに活動しており、英語で積極的にコミュニケーションをとろうとする生徒たちの姿勢が素晴らしかった。その後、事前学習で設定しておいた目標（ゴール）を留学生とシェアし、代表者が全体の前で発表した。どのグループも達成したい目標（ゴール）を発表するだけでなく、To achieve goal, …「ゴールを達成するために」という具体的な手立てを付け加えて伝えており、そこが一番大切な部分であると感じた。

続いて、異文化理解として講師や留学生の出身国について知るという目的で、留学生からのプレゼンテーションを聞いた。どれも魅力的であり、生徒が興味をもって聞いているのがよくわかった。また、プレゼンテーション後の質問も２～３人が自発的に行っていた。１人の質問が一回で終わらず、より深い質問へといく流れとなればさらによいと感じた。

午後は、午前中のプレゼンテーションから学んだことをグループでシェアし、主に日本との相違を話し合った。その後、何人かの生徒がファシリテーターとなって全体でシェアした。

１日目最後には、プレゼンテーションの構成やポイントについて学び、その後で実際にトピックリストから自分でトピックを選び、グループ内で発表、代表者が全員の前で発表を行った。フォローアップクエスチョンの時間もあり、かなり高度な質問も出ており充実していた。上級生である３年生だけでなく、２年生も代表発表者になっており、学年の差を感じなかった。

最後は、リフレクションの時間を設け、１日の反省と次の日に向けての抱負をシェアした。生徒たちだけの活動であったが、できるだけ英語で行うというルールを自分たちで設定し取り組んでいた。

（2）２日目：３月 24 日（木）@東京グローバルゲートウェイ

２日目は東京グローバルゲートウェイ（以下 TGG）での活動から始まった。まずはグループに分かれてのチームビルディングを行い、次にアクティブイマージョンエリアにて「東京の魅力を紹介しよう」というテーマでプレゼンテーションの仕方を学び、３～４人で協力して東京の魅力を伝えるプレゼンテーションを作成した。最後にはプレゼーテンションエリアにて全員の前でプレゼンするという機会もあった。本格的なセットの中でのプレゼンテーションであったため、生徒のモチベーションも上がっていた。

TGG での２つ目の活動は、アトラクションエリアで行った。エアポートを再現したエリアで、パスポートを片手に英語でショッピングをしたり、レストランで注文したり、さらには飛行機の搭乗体験をしたりと、実用性を兼ね揃えながらも生徒にとって非常に楽しい活動であった。一人一人にミッションカードが配られ、全員が話さざるを得ないという状況が作り出されており、綿密に練られたプログラムで素晴らしかった。単独の国際交流プログラムとして TGG 訪問の機会を設けてもよいかもしれない。

TGG のプログラムを終えた午後は、TGG の一部屋をお借りして昨日の異文化交流プログラムの続きを行った。ファシリテーター、留学生に TGG に来ていただき、TGG のプログラムで行ったことを留学生（グループリーダー）に報告するという活動から始まった。この活動はファシリテーターからの「私もグループリーダーたちも TGG に来るのは初めてだから、どんなことをやったのか教えて。」という問いかけから始まったのだが、話す動機づけとしてとても自然なものだと感じた。昨日からお世話になっている留学生ということもあり、緊張感も見られず和気あいあいと話していたのが印象的であった。その後「一番印象に残ったこと“the highlight”」をグループで決め、２人が全体に向けて発表する活動を行ったのだが、全体的に昨日よりも自信をもって堂々と発表していた。

２つ目の活動は、Fun Project １ということで、自分たちのグループリーダーと彼らの出身国について、の True and False クイズを作り、お互いに質問し合うというものであった。どのグループも工夫を凝らしたクイズで、大いに盛り上がった。

最後はファシリテーターから出題されるクイズ大会で、こちらも盛り上がり、グループ内での繋がりがより強くなったと感じた。

（３）３日目：３月 25 日（金）@ 桐陰会館

３日目は「COOL JAPAN を紹介しよう」という Fun Project ２から始まった。ファシリテーターのマーク先生から「外国人から見た COOL JAPAN」を紹介していただき、その後はグループでのブレインストーミングとなった。様々な国から来たグループリーダー視点の COOL JAPAN を知ることで、日本の新たな魅力を発見するきっかけとなった。その後、グループで相談し、「日本を世界に発信しよう」というテーマのプレゼンに向けて準備、プレゼン本番という流れとなった。プレゼンでは、演劇風に行ったり、インタビュー形式で行ったりと、さまざまな工夫を凝らして行っており、聴衆者の一人としても非常に楽しめるものだった。

３日間の最後の活動 Fun Project ３は、事前活動から準備を重ねてきた「文化交流フェスティバルを企画しよう」というものであった。それぞれのグループの企画は以下の通りである。

A 輪投げ・スイカ割り
B 折り紙
C 福笑い・コマ遊び・羽子板
D 箸を使ってのゲーム
E 紙芝居（かぐや姫）
F 浴衣について

それぞれのグループが工夫をこらした企画で、全員が全てのグループのブースを体験できるように時間配分をした。実際の体験の時間では、留学生たちと一緒になって楽しんでいた。また、生徒同士でも英語で会話する様子も見られた。

３日間の振り返りの時間では、間違いを恐れず、自分の思いや学んだことを英語で一生懸命伝えようとする姿がどの生徒にも見られ、とても良い時間となった。前に出て発表した生徒を見て、周りの生徒も勇気づけられたに違いない。さらには、それぞれのグループリーダーから全員に向けてのメッセージをいただき、修了証が手渡された。また、ファシリテーターであるマーク先生からの最後の言葉でプログラムが終了となった。

（４）生徒の感想

グループリーダーの方々はみんな自分の夢を持っていて、それのために勉強したり努力したりしていて、その過程で、様々なものに触れることで、自分の意見を明確に持つようになったのかなと思いました。だから、私も沢山のことを経験して、その中で大小の夢を見つけ、それに向かって頑張る中で、自分の意見を持ちたいと思いました。自分の意見は、国や言語関係なく色んな人とシェアしていければと思います。その時、英語で上手に伝えられなくても、熱意があれば、ジェスチャーなどを交えてきっと伝わると思います。そのためにも、いつでも自信を持って笑顔でいることが必要ということを、このプログラムを通して学びました。（２年女子）

３．令和４年度アメリカ短期留学

春休み期間にアメリカ・ペンシルバニア州にある West-Mont Christian Academy への短期留学が行われる。毎回多くの希望者がいる中、選抜された２・３年生計 37 名（２年 12 名、３年 25 名）が参加することになった。教員の引率は、全日程を３名が引率する。企画概要は以下の通りである。

（１）目的：
① 現地の学校生活を経験するとともに、アンバサダー（学校で付き添ってくれる在校生）やホストファミリーとのふれあいによる異文化理解・異文化交流を通して、視野を広げる。
② 英語を実際に使う体験を通して、外国語学習や学校生活全般への意欲を高める。
③ 海外での経験を他の生徒に伝え、他の生徒の海外への関心や外国語学習への意欲を高められるような働きかけを行う。

（２）日程：2023 年３月 20 日（月）～３月 29 日（水） 10 日間

（３）内容：
本プログラムでは、アメリカ東海岸の現地中学・高等学校を訪問し、現地の学校生活を体験しながら、アメリカ人生徒と交流する。また、現地ではホストファミリー宅に滞在し、週末はそれぞれファミリーと一緒に過ごす。言葉も習慣も違う中、親元を離れてままならない生活体験を通して自分や日本での生活、日本という国を振りかえる機会を得る。こうした機会を得るためにも、参加する生徒が現地で出会う人たちと積極的にコミュニケーションをとることが大切である。

本校の短期留学では、現地に行っての活動だけが目的とならないよう事前研修にも力を入れている。今回は、以下の日程で事前研修を行った。

第１回	・自己紹介 ・コミュニケーション活動（日本のお土産紹介）
第２回	・コミュニケーション活動（日本の行事紹介） ・ホームステイオリエンテーション
第３回	・コミュニケーション活動（チャット活動） ・バーンズコレクションについてのプレゼンテーション ・アメリカ建国史について
第４回	・コミュニケーション活動（チャット活動） ・キリスト教について ・日本文化紹介と Farewell Party の出し物準備
第５回	・参加者及び保護者に対する最終オリエンテーション ・日本文化紹介と Farewell Party の出し物準備

行事の詳細については、来年度に本誌上で報告する。

４．アゼルバイジャンとのオンライン国際交流

在アゼルバイジャン日本国大使館との連携・協力のもと、OCEP（Olympic Culture and Education Programme）の一環として、アゼルバイジャンのバクー・ヨーロッパ・リセ校とのオンライン国際交流を企画する運びとなった。OCEP は、アゼルバイジャンの選ばれた学校と姉妹提携し、両国の歴史や文化、スポーツに関する交流を実施することで、両国若者の間の友好及び相互理解を促進することを目的としている。

本稿を執筆している時点では、春季休業中の３月末に１時間半程度の行事を行う方向で、現地校との議論が進んでいる。行事の詳細については、来年度に本誌上で報告する。

2022 年度の国際交流の報告

2022 年度は、2021 年度と同様に新型コロナウイルス感染拡大の影響により、招聘・渡航による国際交流は実施できませんでした。日中交流は、渡航と招聘を第一の目的としていますので中止となりましたが、それ以外の他の国際交流は、以下の方法で実施されました。

〈対面方式による実施〉
1．シム・チュン・キャット先生のシンガポール特別授業
2．崔智恩（チェジウン）さんの韓国学習会

〈オンラインによる実施〉
3．アジア太平洋ヤングリーダーズサミット（シンガポール・APYLS）
4．ハナアカデミックシンポジウム（韓国・HAS）
5．プリンスエドワード島大学英語研修（カナダ）
6．シンガポール短期留学（代替交流）
7．ESD シンポジウム
8．高校生国際フォーラム
以下にそれぞれの報告を致します。

1．シム・チュン・キャット先生のシンガポール特別授業

２年前は、コロナ禍によりシンガポール学習会実施出来ませんでしたが、昨年度から対面形式で実施が可能となりました。講師は、毎年お願いしている昭和女子大学のシム・チュン・キャット先生で、シンガポールのホワチョン校ご出身の方です。昨年度に引き続き、本年度の学習会にも参加する生徒が複数名おり、2022 年度は、昨年度とは異なったテーマで学習会を実施していただきました。

講義の内容は、シンガポールと日本の教育です。国際調査の結果のデータを多く準備していただき、シンガポールと日本だけではなく、複数の国々との相違点についてもお話ししていただくことが出来ました。特に、教育制度の違いについてのお話を具体的にお伺いすることができたことは、生徒にとってよい学びとなりました。

シム・チュン・キャット先生は、昨年度参加した生徒のことを覚えて下さっていて、講演会後も国際交流についての経験の話をする時間がとれたようです。

２．崔智恩（チェジウン）さんの韓国学習会

今まで約３年間、コロナ禍により韓国学習会を実施することが出来ませんでした。しかし、2022年７月13日（水）の午後３時30分～５時30分までの日程で、韓国学習会を実施することができました。講師は、筑波大学大学院・人文社会ビジネス科学学術院の崔智恩さんにお願いしました。韓国は勿論のこと、筑波大学に在籍しながら日本語教育について研究かつ実践をされている方です。

学習会は、簡単な韓国語講座があり、韓国語での挨拶についてお話いただきました。その後、韓国の文化や伝統、日本との類似点、相違点その他、様々なことについてお話しいただき、韓国の歴史についてのわかりやすい説明などもあり、本校の生徒のよい学びとなりました。また、現地の高校生の取材を交えた動画により、高校生の１日の過ごし方をご紹介いただき、日本の高校生とはかなり違う生活をしていることがわかりました。

３．アジア太平洋ヤングリーダーズサミット（シンガポール・APYLS）

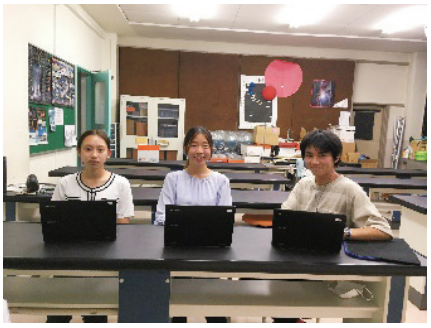
７月18日～21日の４日間、シンガポールのHWA CHONG INSTITUTION（HCI）主催のThe 15th Hwa Chong Asia Pacific Young Leaders Summit（15th HC-APYLS）に本校の２年生３名（女子３名）が参加しました。昨年に引き続き、HCIで「アジア太平洋青少年リーダーズサミット（APYLS）」として行われたサミットに代わって、オンラインで開催されました。日本からは、本校と麻布高校が参加し、13カ国（China, Finland, France, India, Indonesia, Israel, Japan, Malaysia, Philippines, South Africa, United Kingdom, the United States, and Singapore）全26校から計100名以上の高校生が交流しました。全体テーマは「Cyberspace: Connecting Leaders, Conceptualising Ideas, Catalysing Change」でした。各参加者は７つの仮想国に分けられ、テロや自然災害に対してどのように対処していくか、Cyberspaceの観点も踏まえて議論しました。

HPより

パンフレットより

４．ハナアカデミックシンポジウム（韓国・HAS）

韓国ハナ高校主催のプログラムが昨年度に続き今年度もオンライン実施となりました。『食の未来：食の安全への施策』という全体テーマのもとに、３名ひと組の参加チームが自分たちの研究を発表し合うというものです。ハナ高校生徒が中心のプログラムですが、日本からも数校の参加があり、使用言語は英語です。本校からの３名は『害虫抵抗性作物―人体と環境への影響をめぐって』という題目で発表・討論を行いました。



５．プリンスエドワード島大学英語研修（カナダ）

昨年度から、プリンスエドワード島大学（UPEI）の英語研修をオンライン形式で開始しました。期間は、８月中旬から下旬の２週間（月～金）に実施されましたが、時差が 12 時間あることから、午前８時～ 10 時、午後８時～ 11 時という時間帯で実施されました。午前中はアクティビティーの時間、午後は英語の研修が行われ、カナダの移民政策や歴史、自然環境の問題などの内容を英語で学んだり、ディスカッション、発表などが行われたりしました。最終日には、全員が約５分間のプレゼンテーションを行いました。

写真にもあるように、移民政策、PEI の海岸の浸食の問題、食文化の違い、カナダの自然に関する発表など、カナダに関する様々なテーマで 13 名の生徒が発表を行いました。

今後、なるべく早い年度から、現地への渡航が可能になることを願っております。

６．シンガポール短期留学（代替交流）

シンガポール短期留学 代替交流（Virtual Exchange Programme 2022）

例年は３月下旬に、シンガポールのホワチョン校（Hwa Chong Institution）へ約 10 日間の短期留学をしていますが、感染症拡大の影響により 2020 年度、2021 年度に引き続きオンラインによる交流を実施しました。今年度は、11 月 15 日午後４時 15 分～６時 15 分に行われ、関西大学高等部の生徒とともにホワチョン校との交流を行いました。事前交流として、全員が自己紹介ビデオ、各校で自国紹介動画と学校紹介動画を作成し、オリジナリティあふれるそれらの動画を１ヶ月前から互いに共有、及び視聴をしました。

本番では、オンライン会議システムを活用したアイスブレイクで打ち解け合った後、事前交流を踏まえたグループ交流を経て、メインプログラムとしてのグループディスカッションを行いました。トピックは、「地球温暖化問題解決のために私たち若者には何ができるか（Global Warming – Young contribution to solve the global warming problem）」。ホワチョン校の生徒たちからは、シンガポールの環境問題やその対策、若者世代としての考えなどについて丁寧なプレゼンテーションがあり、本校、及び関西大学高等部の生徒たちも日本の状況や自分たちの考えを述べ、高校生同士の国境を越えた意見交流をすることができました。事後にも、お互いに贈り物をし合うなど、オンラインプログラムではありますが、今しかできないとても有意義な体験となったことと思います。

７．ESD シンポジウム

筑波大学附属坂戸高校主催のプログラムですが、昨年度に引き続き今年度もオンライン実施となりました。『持続可能な社会とスクールネットワークを作る新たな 10 年への出発』という全体テーマのもとに、３名ひと組のチームが自分たちの研究を発表し合うというものです。インドネシア・タイ・フィリピンの高校からも参加があり、使用言語は英語です。本校からは HAS に参加した３名が『害虫抵抗性作物―人体と環境への影響をめぐって』という題目で発表を行いました。

８．高校生国際フォーラム

2022 年 12 月 18 日（日）に、令和 4 年度「全国高校生フォーラム」が実施されました。昨年に引き続き、コロナウイルス感染予防のため、オンライン開催となりました。各参加校は、事前にプレゼンテーションを録画（約 4 分間、英語）したものを提出しました。本校からは、２年生の生徒３名（同年度の APYLS 参加者）が、「格差の無い社会を目指して（主な関連テーマ水・衛生・成長・雇用）」グループで、プレゼンテーション、及び質疑応答をすべて英語で行いました。「Creating a Better Business Model for Japan's Future –Using the Power of ICT–（ICT を利用して日本の未来のためにより良いビジネスモデルを作る）」というタイトルのもと、介護や出産・育児による離職問題を考えるうえで、ICT の効果的な活用による仕事とプライベートを両立について、発表を行いました。

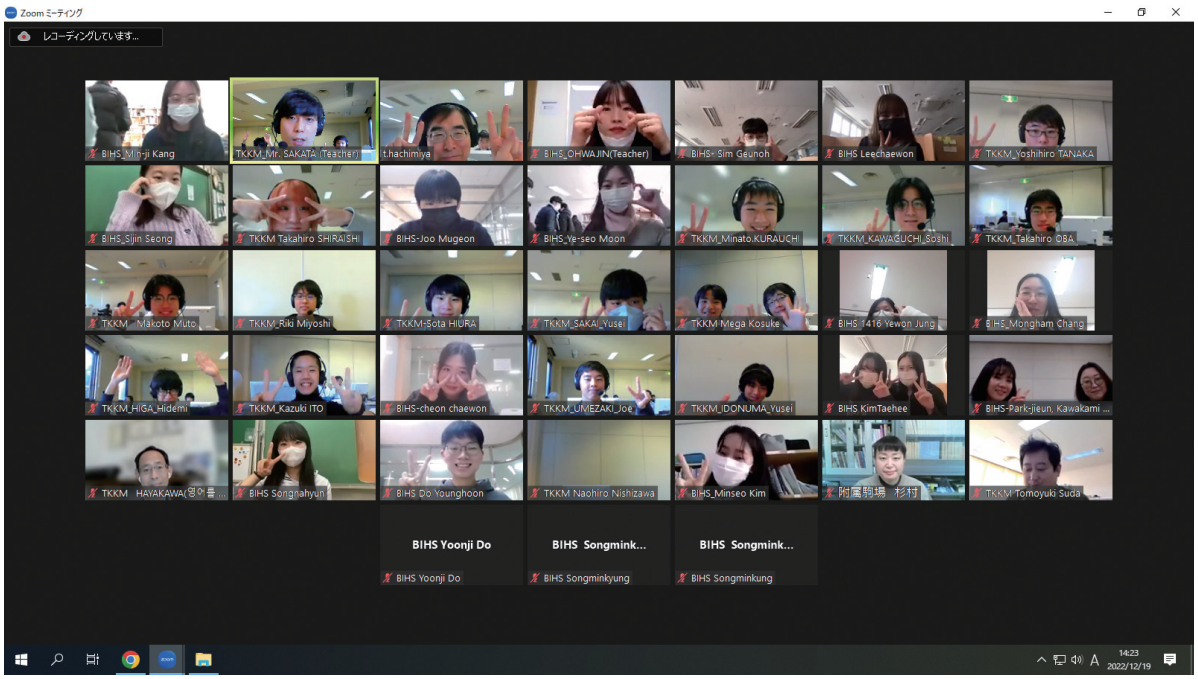
2022年度国際交流プログラムにおける生徒のオンライン交流での活躍

1．本校の国際教育の特徴

本校における国際交流プログラムの目標は、中高６年間を通じて「トップリーダー形成の一助として、国際感覚を涵養するためのプログラム開発・研究を行い、将来国際貢献できる人材の育成を図る」ことである。

この目標の下、20年にわたってスーパー・サイエンス・スクール（SSH）に指定されてきた本校の国際教育の特徴を上げるとすれば、このSSH事業の支援を受けた国際交流活動ということになろう。その中で最大のものは、2009年度より続いている、姉妹校の台中第一高級中学（以下、台中一中；なお、日本の高校に相当する）との研究交流である。SSHプログラムなので、理数系がテーマの研究文化交流という色合いが強いが、文系的内容でもしっかりしたものであれば排除するわけではない。とはいえ、全体としては理数系テーマの生徒が発表の中心になるため、文系生徒がより参加しやすい国際交流事業として、筑波大学からの予算補助を得て2012年度に開始した釜山国際高校との文化交流プログラムもあり、この台中・釜山との派遣交流が本校の国際交流活動の２つの柱となっている（両校とはこちらからの派遣ばかりでなく、本校への訪問の受け入れも行っており、相互交流ということができる）。そこに、他のSSH校との連携で行っている国際交流プログラムが加わる。また、大学からの支援による、放課後のイングリッシュ・ルームも健在である。

ところが、この３年間は、コロナ禍が原因で現地に赴いての研究交流はことごとく中止となった。過去２年の経験の上にオンラインによる更なる交流に活路を見出し、出来得る限りのプログラムを実践した。今回はその報告である。



釜山国際高校とのオンライン交流（ズームによる文化交流。釜山国際高校の生徒とともに）

２．令和４年度活動報告

本校の国際交流プログラムは前述のように、本校単独で企画・実施する、台中一中及び釜山国際高校との交流事業と、他の SSH 校の企画に、本校の生徒・引率教員が参加する２つの形態に分かれる。以下に、まず本校の企画を述べ、その後他の SSH 校との企画について述べる。

（1）台中第一高級中学　（台中一中）

今年度は昨年のような事前の「三宅島フィールドワーク」などもなく、正直言って動機付けに欠けるものがあった。結果的に発表の医師のある生徒は高２・３名、高１・３名という寂しい構成で、通常は学校紹介のみで研究発表は行わない高１も発表を行うことになった。ただ、そうした条件の中でも応募した生徒だけあって準備段階のプレゼン講習でも一人の遅刻者もなく、それぞれの発表内容も例年と遜色のないものであった。やはり「発表したいという純粋な気持ち」こそが研究交流に一番必要なものであるというのが実感である。

ただ、今回新機軸として導入した企画もある：従来の交流は当日のオンライン研究発表のみで、事前に発表者同士が交流することはなかった。今年度は、Google Meet のブレイクアウト・ルーム機能が使用できることになったので、事前に発表者動詞のインフォーマルなオンライン交流をすることにした。

今年度の計画は以下のとおりである：

・９月末まで、現地交流が可能かどうか情勢を見る。台湾が渡航許可の条件に合わず、結果的に 10 月始めに、オンライン交流を決断。また、12 月から３月へ交流を移行。
・11 月下旬：研究発表骨子をまとめ、12 月のプレゼン講習でその時点までの成果を発表。
・期末考査後（12/10（土）：プレゼンテーション・リハーサル。
・１月末に、事前オンライン交流のために参加者プロフィールを両校で配信しあう。
・2/15（水）までに Abstract をまとめ、提出。
・3/10（金）、ブレイクアウト・ルームにより、交流参加者同士、個人レベルで研究内容や、趣味・学校生活など語り合う。
・3/17（金）、オンライン研究交流本番。

上でわかるように、従来は 12 月に研究交流を行っていたのであるが、今年度は３月に実施することになった。この方が、それぞれの研究がより深まった形でプレゼンできるというメリットがある。ただし、そのために、この報告集をまとめている時点では実施されておらず、以下のスケジュールも現時点のものである。

○オンライン研究交流当日の予定

日時：2023 年 3 月 17 日（金）９：00 ～ 12：00
会場：本校 50 周年会館
参加者：高校１年生 10 名、高校２年生３名
（高１のうち３名は研究発表者、３名は学校紹介、４名は楽器演奏（文化交流）である）
プログラム：
９：00- ９：10 Opening Ceremony
９：10-10：00 School Introduction & Cultural Exchange（25min x 2 : TKKM → TCFSH））
10：00-10：05 Short Break
10：05-10：50 first section of research study presentations
（15 min x 3 : TK → TC → TK）
10：50-10：55 Short Break
10：55-11：40 Second section of research study presentations
（15 min x 3 : TC → TK → TC）
11：40-11：45 Short Break

11：45-11：55 Q & A time
11：55-12：00 Closing address
＊ TKKM 筑駒、TCFSH 台中一中の略

なお、当初は高１生徒も発表の予定であったが、新年度の５月に台中一中生徒 60 名が本校に来校することになり（これは隔年で台中一中が本校訪問をしていたプログラムのコロナ後の復活である)、高１生は、その交流プログラム中でプレゼンすることになったため、今回のプログラムでは双方３名のみの発表となった。

以下が、発表者と、そのテーマである。S-2 は高２、S-1 は高１を示す。

S-2 戸田日々輝 TODA, Hibiki: Social Studies_What I Saw in Minamata
S-2 田口信互 TAGUCHI, Shingo: Mathematics_ On the greatest common devisor of power sums
S-2 平田誠治 HIRATA, Seiji: Applied Mathmatics_The Extension of the Assignment Problem and Its Solution
Presenters in May（５月の発表者）
S-1 大庭嵩弘 OBA, Takahiro: Mathematics_Geometric Proofs of Theorems on Tangents
S-1 比嘉秀海 HIGA, Hidemi: Biology_Difference of the Form Between Species of Damselflies and Dragonflies.
S-1 伊藤和生 ITO, Kazuki: Mathematics_Origami Structure

例年は、この後に研究交流後の生徒の感想など挙げるのであるが、今年度は現時点で未実施のため、何も報告することが出来ない。３月のブレイクアウト・ルームによる事前交流、本番の研究交流が成功裡に終わるよう願うばかりである。

（２）韓国・釜山国際高校

本校の国際交流事業のもう一つの柱であり、主に文系向けのプログラムとして、筑波大学からの教育庁裁量経費による支援を受け、2012 年度より続いている。基本的に、釜山国際高校から本校訪問が１月に行われ、３月末に、本校生徒が釜山国際高校を訪問する、という相互交流を行ってきた。ただ、一昨年度はコロナ下で、本校への受け入れも本校から BIHS への渡航も出来ず、交流中止となってしまった。昨年度はオンラインによる交流を２度行った。それなりの手ごたえを得たので、今年度も継続することにした。

①　今年度の事前準備

昨年度からの流れで、先方も交流に乗り気であったため、今年度は早くから７月にオンライン交流をすると決め、５月の連休明けから、高１、高２への参加を呼び掛けたところ、５月末までに高２・５名、高１・38 名もの生徒が希望を申し出た。BIHS の担当者と連絡を取り合い、以下のような流れで進めた。（TKKM ＝筑駒）

②　本番までの流れ

・参加生徒 12 名ほどに学校紹介を分担させ発表。
（５・６時間目で、それぞれ用意させる）
・釜山国際に参加生徒のプロフィール送る。　　（５月下旬）
・釜山生徒（21 名 x 2 クラス）のプロフィール届く。（６月上旬）
・釜山国際の担当者と本校担当者（筆者）とで Zoom 会議（6/15）→本番当日の時程を確認。
・7/09 プレゼンテーション講習（ネイティブのプレゼン・コーチにオンラインでのプレゼンの作法を鍛えていただく
・7/11 本番迎える。

◎釜山国際高校とのオンライン交流１

７月 11 日、10：30 ～ 12：30　コンピュータ・スペース
TKKM 43 名（Senior 1・38 名、Senior 2・５名)、BIHS 21 名（Senior 1）x 2 classes

（筑駒生前半の 22 名が釜山国際高校の日本語副専攻の授業にオンライン参加）
10：30　Greetings（挨拶）
　　グループ発表：TKKM, BIHS 各 6 分
　　コロナ後の学校生活について
10：55 ブレークアウトルーム
　　（TKKM2 + BIHS2）x10 groups　（30 分）
＊グループ発表のテーマに沿って、または好きなものの写真などを用意して、それについて説明しあう
11：25　Closing address（授業参加に対する感謝のことば）
11：30　（3 限終了）
＊同様の内容を、筑駒生後半の 21 名が参加し、4 時間目（11：40 ～ 12：30 も別のクラスにて実施する。

先方の授業にお邪魔して交流するというのは時間が限られており慌ただしかったが、それでも初めてオンラインで海外との高校生と交流するという体験は有意義なものであった。以下に感想を掲載する：

◎生徒の感想
・まず、自分がうまく英語を喋ることができないということ、自分の今の立ち位置をしっかりと確認できた。12 月にもあるということなので、大きなモチベーションにもなっている。
・韓国の生徒には日本のことが好きな人が多いと思った。特に、僕たちはまったく韓国語を話せないのに、僕のグループの BIHS の子たちは日本語が上手で驚いた。政治上では、日韓関係は戦後最悪といわれるが、こういった民間の間で交流して親睦を深め合うことがとても大切だと実感した。自分はイギリスに住んでいたことがあり、ヨーロッパの人とは交流したことがあるが、アジアの人との交流は初めてだったので、とても良い経験になった。
・下手な英語でも喋ってみれば意外と伝わるものだから怖がらなくていいということ
・海外の人との繋がり
・韓国というと、何かと日本にこじつけてくるような印象が強かったが、別段自分たちと同じような人、モノを好んでいると知り、かなり親しみがわいた。
・英語で会話をすることができたという自信 今後の学習へのモチベーション
・英語を話す力の欠如を知ることができた
・韓国の高校生の英語のレベルが高かったため、自分ももっと勉強しようという気になったこと。

コンピュータ・スペースでブレイクアウトルームを楽しむ参加生徒たち

◎釜山国際高校とのオンライン交流２

１学期の交流が好評で、BIHS でも２学期末に同様の交流を行う方向で同意してくれた。そこで、今回も多数の生徒が参加すると予想していたが、12 月の期末考査後の放課後に実施することにしたためか、実際には 10 月の段階でも、生徒の反応は鈍く 13 名程度の希望者であった。そこで文化祭後に中学３年生にも呼びかけ、３名希望者が出て、合計 16 名の参加者を得た。

12 月 19 日、13：30 ～ 15：30　コンピュータスペース

TKKM 15 名（Senior 1・12 名、Junior 3・３名）、BIHS 16 名（Senior 1）x 2 classes（TKKM@Computer Space）（釜山国際高校の日本語副専攻の授業にオンライン参加）

13：30　Greetings（挨拶）

グループ発表 TKKM、BIHS 各５分

・学校紹介　/ コロナ後の文化祭

13：40　ブレークアウトルーム

（TKKM ２ + BIHS ２）x10 groups （30 分）

グループ発表のテーマに沿って、また学校生活・趣味などについて話しあう）

14：15　Closing address

（授業参加に対する感謝のことば）

14：20 （５限終了）

＊同様の内容を、６時間目（14：40 ～ 15：30 も別のクラスにて実施する。今回は参加生徒数が 16 名のため、同じ生徒が６時間目も交流）

また、今回は、先方も同年齢の高１生徒ということで、より積極性もあり、２クラスとも大いに盛り上がった。２クラス目の最後に、集合写真をスクリーンショットで撮ったので掲載する（本稿、扉の写真）。

◎生徒の感想

・コミュニケーションが実際に英語でできたという自信。
・韓国でも、日本の文化（特にアニメ等）が浸透しているということが分かりました。海外の人と日本のことについて話すと、自分たちが当たり前に触れてきた日本の文化に関して違った視点をもてるなと感じました。
・１対２という逃げ場の無い状況で話したことで、積極的に話すメンタルが鍛えられた。
・自分には英語で相手に伝える力が全然足りていないことを思い知りました。ブレイクアウトルームでは、言葉に詰まってしまうことも多かったです。でも、しっかり伝えようと思えば、意外と伝わることも分かりました。
・英語を勉強するモチベーションと韓国への興味
・異文化を知ろうとする姿勢
・英語を使って海外の同世代の人と話すという貴重な体験ができた。
・文法といった、授業で習うような“正しい英語”がすぐに出てこなくても、“とにかく伝えること重視の英語”をしゃべる経験。
・英語を実際の外国の人との会話で用いるときの方法、感覚。

◎考察

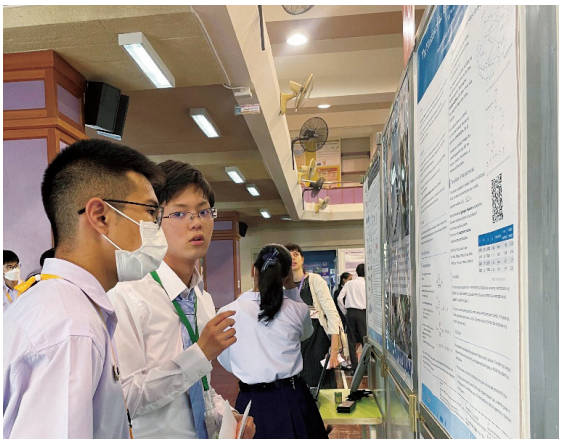
この３年間、釜山国際高校と現地での交流はないものの、昨年度から年２回のオンライン交流を実施し、今年度は２度目であった。生徒の感想にもあるように、全体として有意義な交流を持つことができたと言える。特に第１回の高校１年生の参加者は 38 名で、これは全高１生の４分の１、１クラス分に当たる。高校入学して３か月の新鮮な時期に、学年の４分の１の生徒が、英語を実際のコミュ

ニケーションの道具として使用できたという実感は大変貴重なものである。わずか２時間足らずの交流でも、Zoom のブレイク・アウトルームの活用で、対面して１対１で話せたという経験は、予想以上の刺激になったようである。現地での交流が再開した後でも、オンライン交流を補助的に活用して、国際交流をさらに有意義なものにしたいと思う。

（3）TISF2023

本校は隔年でタイの国際科学フェア（Thailand International Science Fair）に招待されており、今年度も１名の生徒が参加している。非常に充実したプログラムで、渡航費は参加者負担であるが、現地での宿泊・食事・移動費は主催者もちで、研究発表だけでなく、サイエンスツアーや文化交流など様々なイベントがある。目下、そのイベントが開催中で写真は間に合わないが、日程、会場は以下のとおりである：

1．日　程　2023 年２月 12 日（日）～２月 17 日（金）　６日間
2．場　所　　Mahidol Wittayanusorn School
3．参加者　平田誠治　Applied Mathmatics_The Extension of the Assignment Problem and Its Solution



ポスターセッションで説明する生徒

タイ・国際サイエンスフェアの会場にて

３．まとめ

以上、本校の国際交流の実践を紹介した。例年の本校の国際交流の特徴は、事前準備に相当時間をかけていることであったが、今年度もコロナ禍で、その準備もなかなか危ぶまれた。しかし、昨年度のオンライン交流の経験を踏まえ、さらに一歩進めつつ新しい媒体での研究交流の可能性を広げることができた。例年通りではないが、例年とは違った体験を通じて学びがあったことも事実である。特に、釜山国際高校との交流例のように、学校対学校というのでなく、具体的な授業にオンライン参加するというのは、小回りが利き、比較的手軽に実施できる点で大きな発見であった。本校は永年にわたり、SSH の援助を受けて様々な国際交流を実施してきたが、今年度から SSH 第４期の経過措置の扱いで、従来よりも予算的には厳しいものになっている。国際交流も、SSH 以外にも財政的支援を求める時期にも来ている。コロナ後は、新たなステージを迎えるのではないかという気がしている。

（文責：研究部・国際交流担当　八宮孝夫）

次の５年を、国を越え支えあいながら

１．本校の国際教育の特徴

附属坂戸高等学校（以下「本校」）では平成 20 年に校内の国際教育推進委員会（Committee of International Studies、以下「CIS」）を設置し、それ以来本校独自の取り組みである「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」、ブラジル、タイ、カナダ、台湾、インドネシアなど各国からの留学生の受け入れ、ユネスコスクールへの加盟、学校設定教科「国際」及びその科目の設置、及び本校が主催する「高校生国際 ESD シンポジウム」などを通して、総合学科高校だからこそ可能である多角的な国際教育のあり方を模索しながら実践を積み重ねてきた。そして、これまでの本校の実践の成果をベースとして、平成 26 年から５年間、文部科学省のスーパーグローバルハイスクール（SGH）として、「グローバル社会において、自分自身は社会とどのようにかかわり、平和で持続可能な社会を実現するために何ができるか」を生徒自身が考え、実践できることを重視した国際的な視野に基づく探究学習プログラムを展開してきた。

1946 年に地元の農業高校として発足してから 76 年、1994 年からは日本初発の総合学科高校のパイオニアとして 30 年に迫る歩みを重ね、平成 26 年度の SGH 指定後は、総合学科を生かしたグローバル社会におけるキャリア教育の実践を積み重ねている。2022 年４月には、国際バカロレア日本語 DP の５期生が入学した。本年度も最終試験を受験した生徒は、世界平均を上回るスコアを獲得している。

本年度は、本校が大切にしてきた海外との直接交流ができる機会が増加してきた。タイ・カセサート大学附属カンペンセン校からの３年ぶりの訪問、SEA-teacher パイロット事業の３年ぶりの再開、そして ACCU 教職員交流を通じた国際比較研究事業にも採択された。これまでの３年間は、思うような活動がなかなかできなかったが、2022 年度は、次の５年間につながっていく起点となる年となった。

本報告では、３年ぶりの海外との直接交流となった上記３つの活動を中心に報告を行う。

ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校（インドネシア）・カセサート大学附属高等学校（タイ）との
５年間の国際連携協定更新セレモニー（2023 年２月 10 日調印）
（インドネシア大使館教育部 Pak Yusli 部長、留学経験者（卒業生）、留学希望者（在校生）、
アセアン地域国際連携校・SEA-teacher 協力校教員も参加）

２．タイ・カセサート大学附属高等学校カンペンセン校来校（高大連携・WWL）

2017 年度に、教員視察団の訪問を受けてから、2018 年度に本校の教員が訪問。その後、高校生国際 ESD シンポジウムへの参加など探究学習をベースとした交流を続けてきたが、COVID-19 の影響により、オンラインによる年１回のオンライン国際シンポジウムのみの交流となっていた。

2022 年 10 月 25 日（火）に、生徒 59 名、引率８名の訪問を受けた。１年次生全員との交流や４つの授業への参加など、久しぶりの直接交流で、両国の生徒、教員が交流を深めた。今後、国際連携協定の調印に向け、両校で協議を重ねていくことで一致した。

科学実験の授業に参加している様子

１年生全員との交流の様子

３．SEA-teacher パイロットプロジェクトについて（筑波大学国際局、CRICED との連携）

SEA-Teacher プロジェクトは、東南アジア教育大臣機構 SEAMEO（Southeast Asia Ministers of Education Organization）が行う、各国大学間交換教育実習（Internship Program）である。教員養成課程の中で重要な必修科目である教育実習を、東南アジア地域内で国境を越えて行っている。

SEAMEO における国内唯一の提携機関（Affiliate Member）である筑波大学には、当初より参加打診があり、2020 年２月に本校が協力校として日本ではじめて参画し、筑波大学国際局との連携によりパイロットプロジェクトとして実施した。COVID-19 の影響で、３年間中断していたが、2023 年２月に再開した。タイ、インドネシア、フィリピンの大学生の受け入れだけではなく、筑波大生も３か国に渡航し実習を行っている。

今回は、パイロットプロジェクトの第２回目として、インドネシア教育大学、セントラルルゾン州立大学、コンケン大学から各３名、計９名の大学生を受け入れた。教科は、英語、数学、理科、地歴公民、体育、芸術である。「グローバル人材を育成できる教員の育成」につながる本事業は、参加した学生だけではなく、受け入れる高校の教員や生徒にとっても価値のある事業である。今後、本校だけではなく、日本全国に事業が広まっていくよう、本校での受け入れ経験を外部に積極的に発信していきたい。

公民科の授業でイスラム教について英語で授業を行うインドネシア人教育実習生

全校歓迎会の様子

４　教職員交流を通じた国際比較研究事業（ACCU 委託事業）

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が公募を行った、令和４年度文部科学省委託事業「新時代の教育のための国際協働プログラム」に採択された。「ESD for 2030 を担う教員養成のための国際協働教育実習プログラムに関する国際比較研究」をテーマに、上記３．の SEA-teacher パイロット事業に関連した国際交流事業を推進した。本校が国際連携協定を締結しているアセアン各国の３校、SEA-teacher 協力校であるアセアン３校、計６校の海外大学の附属高校の教職員との交流を、ESD と SDGs をベースに行った。６校はすべて筑波大学が国際連携協定を締結している大学の附属高校である。大学と附属学校が連携することで、多様な国際教育が展開できる可能性を見出すことができた。

・教員派遣

ａ）2022 年 12 月 11 日～ 2022 年 12 月 15 日 教員５名派遣
派遣先：タイ　コンケン大学および附属高等学校、カセサート大学および附属高等学校

ｂ）2022 年 12 月 21 日～ 2022 年 12 月 27 日 教員４名 職員１名派遣
派遣先：インドネシア　インドネシア教育大学および附属高等学校、ボゴール農科大学および附属コルニタ高等学校　等

・教員招聘

期間：2023 年２月７日～ 2023 年２月 12 日　教員 12 名招聘（各校２名）
タイ：コンケン大学附属高等学校、カセサート大学附属高等学校
インドネシア：インドネシア教育大学附属高等学校、ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校
フィリピン：セントラルルゾン州立大学附属高等学校、フィリピン大学附属高等学校

コルニタ高校教職員と　　日本の探究学習について説明を行う本校教員

コンケン大学附属高等学校にて

カセサート大学附属高等学校にて

大学会館嘉納治五郎先生之像の前で
国内外７校の大学附属学校教員と筑波大学留学生会の留学生と

５．2022 年度のおもな国際教育活動例一覧

アジア学院研修プログラム@栃木 （2022 年 6 月 30 日～ 7 月 2 日：生徒 11 名、引率 2 名）
オーストラリア夏季研修プログラム@メルボルン、シドニー （2022 年 8 月 7 日～ 8 月 13 日：生徒 19 名、引率 3 名）
台湾から 1 年間、留学生を 1 名受入 （2022 年 9 月～ 2023 年 7 月）
WWL 連携企業・APPJ 社、インドネシアコルニタ高校、インドネシア環境林業省附属高校との連携による SDGs オンライン学習（2022 年 9 月～ 11 月：1 年 SG クラス）
埼玉県川越都市圏まちづくり協議会（レインボー協議会）レインボーフェスティバル国際交流会 （2022 年 10 月 1 日：1 年生 SG クラス）
タイ・カセサート大学附属カンペンセン校来日 （2022 年 10 月 25 日：生徒 59 名、引率 8 名）
第 11 回高校生国際 ESD シンポジウム・The 4th SDGs Global Engagement Conference @ wherever you are（2022 年 11 月 12 日：海外校 5 校、国内 5 校参加）
ACCU 教職員の国際交流を通じた国際比較研究 （2022 年 12 月　タイ 5 名教員派遣、インドネシア 4 名教員派遣） （2023 年 2 月タイ・インドネシア・フィリピン各 4 名計 12 名海外大学附属高等学校教員招聘）
AIMS 筑波大学留学生交流会@坂戸 （2023 年 1 月 28 日：留学生 38 名、高校生 40 名
SEA-teacher パイロット事業受入 インドネシア教育大学、コンケン大学、セントラルルゾン大学　教育実習生各 3 名計 9 名 （2023 年 2 月 7 日～ 3 月 7 日）
11th SEAMEO-University of Tsukuba Symposium での本校教諭の発表 本校、吉田教諭（IBDP コーディネーター）が、SEA-teacher に関する報告を行う （2023 年 2 月 22 日　シンポジウム参加登録者数：10700 人）
埼玉県越生町梅 Festival における国際交流 （2023 年 2 月 25 日：SEA-teacher パイロット事業実習生 9 名、高校生 50 名）

６．生徒の変容について

SGH および WWL に参加した生徒の中長期的変容の調査では、進路先は、国際系学部だけではなく、多様な進路につながっていることがわかった。SGH や WWL の評価では、英検の合格者数の変化や、国際系学部への進学者数の割合などで、生徒の変化やプログラムの効果を測定することが多いが、高校時代に海外プログラムを経験した生徒な変容や大学入学後の学び、大学卒業後の就職にまでその影響が及んでいることがわかった。今後も、高校時代の経験がどのように中長期的な影響を及ぼすか、学校現場から発信していきたい。

（文責：建元喜寿）

視覚障害教育におけるグラスルーツの国際交流

１．本校の国際教育の特徴

2022 年度の本校における国際教育は、COVID-19 感染拡大が齎したプラスの遺産でもあるオンライン会議システムをフルに活用し、いくつか新しい取り組みを行った。また、対面での活動も徐々に復活してきている。新しい取り組みとしては、グローバルカフェ 2022 と称して、長期留学の経験があり、国際社会で活躍している４名の卒業生のオンライン講演会を実施した。中学部・高等部の生徒が参加し、講演の後には熱心に質問をしていた。また、フィリピンの教育支援をしている NPO とコラボし、視覚障害のある高校生のオンライン交流会を開催した。本校の生徒がファシリテーターをし、英語での交流会のリーダーとして活躍した。

本誌では、上記の活動の他、３年ぶりに実現したトビタテ！留学 JAPAN の制度を利用した高等部生徒のタイへの短期留学、小学部５年生と鍼灸手技療法科留学生との交流会、本校生徒と卒業生パラアスリートとの交流等について報告する。

今回の報告には含めていないが、2023 年２月１日から 28 日まで、ドイツのハンブルク大学で視覚障害教育を学んでいるドイツ人の大学院生を１か月インターンとして受け入れた。授業見学や参加、各教科における視覚障害児童・生徒に対する配慮についての説明、各部科の教育の説明、クラブ活動への参加、図書館や資料室の見学等のプログラムを、本人の希望に基づいて作成・実施した。このような交流も国際的な視覚障害教育の連携の一貫として意義があると考えている。

2023 年度も、上記の活動を継続・発展させながら、視覚特別支援学校のナショナルセンターとして、また視覚障害教育専門機関としての国際的な役割を担うセンターとして、そしてグラスルーツの国際交流を通じて、視覚障害教育における国際教育活動を推進していきたい。

（写真）トビタテ！留学 JAPAN でタイ・コンケンに留学する高等部生徒
Khon Kaen Wittayayon School（インクルーシブ教育校）にてバディーの生徒や支援室の先生と共に

（文責：青松利明）

２．グローバルカフェ 2022 を開催

「将来、留学したい」「異文化に関心がある」「海外で生活する方法を知りたい」「国際的に活動する先輩の話を聞きたい」と希望する生徒を対象に、中学部・高等部国際教育推進委員会は夏休みを利用し、本校卒業生で海外に留学経験のある方や海外で実際に働いている方４人からお話を伺う企画「グローバルカフェ 2022」を開催した。当日は中学部生徒３名、高等部生徒 13 名、教職員 12 名が参加した。（2022 年８月２日、４日にオンラインで実施）

講演者氏名	講演者の紹介及び講演テーマ
café 1　M.K. さん （2013 年度高等部卒）	カナダの大学でソーシャルワークを学んでいる方 テーマ：「生きやすい場所で生きる～カナダで見つけた多様なキャンパスライフの形～」
café 2　M.K. さん （2016 年度高等部卒）	ドイツの大学でドイツ語や心理学を学んだ方 テーマ：「外国語から得るもの－現代ドイツのさまざまな壁をこえて－」
café 3　H.Y. さん （2002 年度高等部卒）	アメリカ、タイ、インドでの留学経験があり、現在タイで NGO を立ち上げて活躍している方 テーマ：「白杖とおしゃべり：世界中で使える盲人のサバイバル極意」
café 4　K.R. さん （2002 年度高等部卒）	アメリカの大学で社会福祉を学び、現在和太鼓奏者として活躍している方 テーマ：「ニューヨーク珍道中～学んだり悩んだり結婚したり～」

卒業生４名の留学に対する熱意や行動力、またぶつかった壁にどう向き合って解決してきたのかなど、大変参考になるお話があり、参加した生徒たちは卒業生から多くの刺激を得られた。以下は、本交流会に参加した本校生徒の感想の一部である。（　　）内は生徒の学年と氏名をイニシャルで示す。

café 1 への感想

・私は M.K. さんのお話を聞いて、カナダには親切な人が日本よりも多いということを初めて知りました。私は日本から一度も出たことがないので、海外に行ってみたいと思いました。海外のユニバーサルデザインにとても興味があるので、留学してみたいです。（中３ T.K. さん）

・カナダでの留学経験についての講演を聞き、最も強く感じたことはカナダ国内でも文化や人種、人柄が日本とは異なる点が多く、多様であるということです。特に印象的だった点は、教室のような少人数の場所でもいろいろな国からの人が集まっていて、言語や文化、服装の違いもさまざまな生徒がいること、表現がストレートなこと等から、日本との違いを感じました。今回の講演ではカナダを視覚障害者が留学してみて感じた、経験したこと、多様な人種、文化といったいろいろな側面から知ることができ、とても面白い貴重なお話を聞くことができました。（高２ Y.R. さん）

café 2 への感想

・ドイツ留学以前のお話で、大学で第２外国語としてドイツ語を学んでいる時に大学の先生にドイツ語の問題を穴埋めさえすればいいという考えで勉強をしていたら、学問は穴埋めではないと怒られた、そこから学ぶという事への姿勢が変わったというお話に感銘を受けました。またドイツで必ず学んでくる、ドイツに行ってその場だけでなく一生の人脈を作るという事を留学の時に決意したというお話があり、留学を何としてでも成し遂げてくるという意気込みのすごさを学びました。（中２ K.H. さん）

café 3 への感想

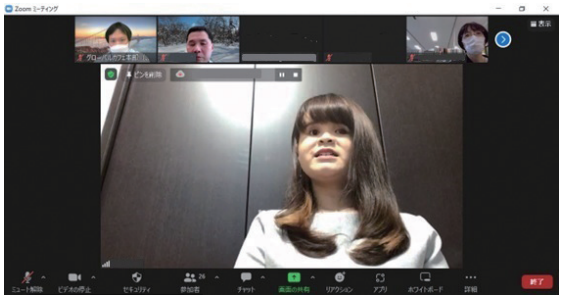
・海外でアクティブに活躍されている姿が伝わってきて刺激を受けました。講演では実際に音を聴いて、タイの様子を感じることができて楽しかったです。「自分の心に正直になって、自分が生活したいと思う場所を見つける」というお話が印象に残っています。改めて海外での生活に挑戦したいと思いました。（高２ Y.K. さん）

・お話の中で拝聴できた様々な音や、（H.Y. さんはタイから講演されていましたが）講演中に発生し

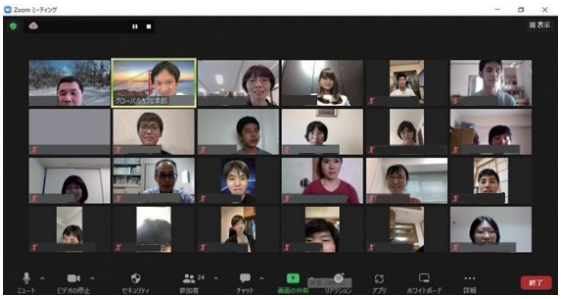
た停電など、日常の中では感じられない異国情緒あふれる情景と、鮮明な臨場感に、大きな感銘を受けた。同時に、促進が叫ばれる社会のバリアフリー化に対する新たな視点を得られたし、現在教育を受けることのできている幸せ、様々な活動への積極的な参加の重要性を感じた。（高２ M.S. さん）

café 4 への感想

・優しく声をかけてくださったり、道を歩く時の誘導をしてくださったりしたニューヨークの人々やユニバーサルデザインが徹底された大学の校舎についてのお話を聞き、こんなにも障害者に対する配慮がなされている環境があるのだということを初めて知り、驚きました。また K.R. 先生のお話を聞いて、留学は、その国でしかできないような勉強や経験をするためのチャンスなので、その貴重な体験を無駄にしないためにも、留学する前に、留学先の国の言語の能力をしっかり身につけておくことが大切だということが分かりました。（高２ I.N. さん）



café2 COVID-19 の中での留学が人生を変える



グローバルカフェ　全体集合写真

（文責：永山香織）

３．トビタテ！留学 JAPAN ～念願のタイでの留学経験で世界観が変わる～

（１）トビタテ！留学 JAPAN の制度でタイ王国へ

トビタテ！留学 JAPAN（以下、トビタテ）高校生コースは将来世界で活躍したい、日本から世界に貢献したいと熱望する、意欲高い高校生の留学を高等学校段階から文部科学省が支援する留学制度であり、本校は本制度を利用した留学を積極的に行っている。トビタテ７期生として本校５名の生徒がアカデミック・ショートコースに合格し、タイへの留学に向けて準備を進めていたが、COVID-19 の影響により渡航延期を余儀なくされた。本年度、感染症危険情報レベルが１に引き下げられ、留学先との安全が確認されたことから、３名の生徒が 17 日間のタイに留学する機会を得た。

（２）研修生

高等部３年　普通科生徒　３名

（３）留学先

受入校　The Christian Foundation for the Blind in Thailand（国際交流協定締結校）
（タイ視覚障害者支援クリスチャン財団、以下 CFBT とする）

・2023 年１月 29 日（日）～２月 14 日（火）17 日間　コンケン（タイ・北東部）
Khon Kaen School for the Blind：コンケン盲学校（CFBT が運営する盲学校）
Khon Kaen Wittayayon School：インクルーシブ教育校（コンケン盲学校が連携している学校）

（４）留学の主なテーマ

○ CFBT　コンケン盲学校での取り組み
・タイの盲学校で視覚障害教育を学び、日本の教育との違いを考える
・文化交流（日本とタイの料理を紹介し合うなど）や視覚障害教育について発信する活動
・ホームステイでタイの家庭で過ごす体験と寄宿舎での集団生活を体験

○インクルーシブ教育校での活動
・CFBT が連携しているインクルーシブ教育校で学習・生活する機会
・視覚障害生徒（バディー）と共に英語、理科、音楽、体育、日本語（第３外国語）の授業に参加

・障害生徒を支援するセンターでの取り組みを学ぶ

○アンバサダー活動（日本の大使としての活動：トビタテ留学のミッション）

・生徒自身が設定するテーマに基づいて発表

日本の視覚障害スポーツを紹介し、交流試合（フロアバレーボール）

日本の視覚障害教育で使われている教材や視覚障害者が使っている補助具の紹介及び実践

タイで買った食材を使い、日本料理を振る舞う（肉じゃが、おしるこ、お味噌汁など）

（5）留学を通して学んだこと（生徒の感想：生徒氏名はイニシャルで示す）

K.K. さん「言語を超えたコミュニケーション」

私はこの２週間の留学の中で、コミュニケーションの手段が言語だけを指すのではないのだと実感した。今回留学したタイでは、主にタイ語、次に英語、第３外国語に日本語を選択する人もいるという場所であったが、事前に勉強していた言語知識はほぼ役に立たなかった。

現地に行ってみると、まず英語が通じない学生や大人も多く、自分の知っているタイ語にも限度があったため、いきなり言葉の壁に突き当たることになり、翻訳サービスに頼ることになった。確かに、翻訳サービスでもコミュニケーションは取れるが、機械を通した会話では、仲良くなるというのは難しいことであり、事務的な要望を伝えることしかできない状態に苛立ちを感じていた。

しかし、それを乗り越える方法はすぐそこにあった。自分の声のトーン、体の動き、表情、歌や折り紙や食べ物など、身の回りにあるものや自分自身が持っているものこそが、最大のコミュニケーションツールとなったのだ。腕相撲をして盛り上がり、梅干しを食べ叫び、音楽を聞いて感動する。そして、別れのときには共に涙を流す。

私は、この留学で多くの友人を得ることができた。これは、言語だけのコミュニケーションに囚われていては、絶対にありえなかったことであると思う。相手になにかを伝えようとする気持ちや工夫こそが、コミュニケーションの本質であると気づかせてくれたこの留学は、私にとって大切な宝物だ。

A.S. さん「日本とタイのインクルーシブ教育の違いについて」

私の留学の目標は、タイのインクルーシブ教育を学ぶことでした。事前に日本のインクルーシブ教育の現状を調べ、タイではインクルーシブ校で授業を受け、支援室の先生にインタビューしました。

インクルーシブ校では 4,000 人の生徒のうち、視覚障害者は６人でした。学校は日本の大学のようで、校舎が広く建物も多く、授業ごとに教室を移動するので大変でした。授業ではプリントや、ワークシートとスクリーンを使用して行われており、内容について生徒たちが周りの生徒に聞くなど、現地の生徒もかなり授業は大変だと言っていました。先生へのインタビューでは、支援体制、進学、就職先についてたくさんお話を伺い、日本との違いを知りました。

今回の目的の一つであるインタビューが達成できて良かったです。タイのインクルーシブ教育は、自分の眼疾や必要なことは、先生や友達に話して、支援を自分から頼むなど、自分の力で進めるので、精神的にも鍛えられると思いました。私は 40 人もいる授業で学んだことはないので、友達を作ったり、話しかけることすらできないかと思いました。今回の経験を生かし、インクルーシブ教育を日本にもっと取り入れられるように、これからもインクルーシブについて勉強し、実践していきたいです。

S.T. さん「タイのインクルーシブ教育に学ぶ」

今回の留学では、現地の学校で授業を実際に受けることで、タイのインクルーシブ教育の制度や支援の体制について調査することが目的であった。留学するにあたり、事前に、タイの教育制度について調べるとともに、現地の生徒とのオンライン交流会に参加し、タイの教育や文化について、知識を深めた。

現地では、授業時の視覚障害生徒の様子や利用する教材、周りの生徒による支援を観察し、実際に生徒の話を聴くことで、その教育の利点と問題点を把握することができた。また、校内で支援にあたる教員への聞き取りや、視覚障害生徒のための特別な教材、支援機器を観察することで、生徒への支援の内容を理解できた。

私は特に、他の生徒が視覚障害生徒に対して積極的に移動の支援や情報保障をしている姿が印象に残っており、この制度が障害のある生徒だけでなく、他の生徒にとっても良い経験になっていることが分かった。一方で、実技教科では、視覚障害生徒が参加できていない場面も目立っていた。

資料の点訳、特別な教材の作成など、専門教員による支援体制も充実しており、専門性のある教員の確保は重要であると感じた。日本の制度発展のため、これから、この経験を多く発信していきたい。

コンケン盲学校　寄宿舎生活

インクルーシブ教育校

英語と音楽の授業に参加

インクルーシブ教育校

日本語の授業でも活躍

フロアバレーボール交流試合

（文責：佐藤北斗）

４．小学部５年生と鍼灸手技療法科留学生との交流会

2022 年 12 月 5 日（月）４時間目に留学生との交流会を行った。キルギスと中国の２か国の方からそれぞれの国の食べ物、気候、小学校の学習の様子の話を聞かせていただいた。また、キルギスの帽子や鞭を触らせていただいたり、中国の小学校５年生が歌っている歌を紹介していただいた。キルギスは 45 度からマイナス 20 度と気温差が大きいこと、山には１年中雪が積もっていることを知って驚いていた。子どもたちからは、お寿司の好きな留学生に、大トロと中トロの違いについてお話しする場面もあった。今後も交流を続けられると良い。とても貴重な異文化体験となった。

２人の留学生のお話を興味深く聞いた。
キルギスの帽子もかぶらせていただいた。

キルギスの鞭をじっくり触っている様子

（文責：進　和枝）

５．高等部　フィリピンとのオンラインによる交流会について

高等部では、NPO 法人フリー・ザ・チルドレン・ジャパン（以下、FTCJ）のフィリピン視覚障害者教育支援事業に参画し、以下２つの目的のもと、フィリピンの視覚障害生徒とオンラインによる交流会を開催した。

①フィリピンの視覚障害生徒と「視覚障害教育」や「異文化」をテーマに、オンラインでの交流を通して、外国の歴史・文化を理解し、自国の歴史や文化を深く知る機会とする。

②フィリピンの視覚障害者のおかれている現状、とりわけ「教育」「就労」「ICT の活用」など、様々な社会課題を共有することで、国際的視野及び国際社会に貢献する意欲と態度を育成する。また、国際社会に向けた生徒たちの主体的な探究活動の機会につなげていき、さらには持続可能な社会に向けた学習の機会としたい。

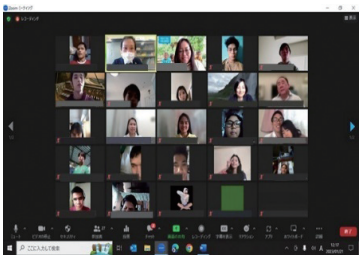
フィリピンからは、FTCJ の現地パートナー団体 PBU（フィリピン盲人連合）協力のもと、オンライン授業を受けるために必要な性能・機能を有したスマートフォンを無料提供された低所得世帯の視覚障害のある子どもたち（日本の中１～高３）の中から 23 名が、本校からは高等部２年生２名、１年生１名の計３名が参加した。

交流会冒頭に FTCJ 代表理事の中島早苗氏から団体概要説明、活動紹介、PBU 会長ブッチ・ロブレド氏から挨拶とお礼のスピーチが英語で行われた。アイスブレイクでは、“「お金」と「愛」どちらが大切か”などの簡単な２択の質問を英語でそれぞれ自由に出し合い、理由と共に答えることで、お互いの価値観について共有しながら交流を図った。メインのディスカッションでは、興味がある社会問題の共有が行われた。一部のグループでは、英語での意思疎通に苦心する様子が見られたが、それでもなんとかお互いに理解し合おうとするやり取りに意味があったと感じている。参加生徒達も今回の経験が英語学習のモチベーションになったと話している。

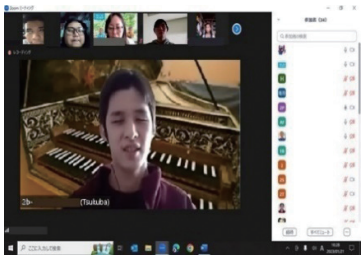
以下は、本交流会に参加した本校生徒の感想の一部である。（　　）内は生徒の学年と氏名をイニシャルで示す。

①当日のディスカッションのテーマの考案やレクレーションの企画なども、参加者の間で相談しながら取り組むことで、交流会がより楽しくなるのではないかと思いました。今後も、今回のような会に参加できることを、楽しみにしています。（高２ S.M）

②言語の壁を越えて一つのことに共に取り組む上で生じるコミュニケーションの困難さと、その楽しさを感じました。ディスカッションでは、話し合いとまではいきませんでしたが、各自活発な意見が出され、お互いに新たな知識を得ることができました。日本側として参加して驚いたのは、フィリピン側で SDGs を知っている方がいなかったことです。ただ、社会問題への意識は、SDGs を知っているかどうかにかかわらず、高いことがわかり、私たちが共にこれからの社会を変えていく一員になれたら良いなと思いました。フィリピンの方は皆お話が好きで、積極的な方が多く、私自身、多くのパワーをいただきました。それから、今回の交流会を通じて、海外に住む自分と同じ視覚障害者の方々の生活についてもっと知りたいと思いました。昨年参加させていただいた、タイとの交流会でお話したような、インクルーシブ教育やテクノロジーに関するお話も、フィリピンの方からいつか聞いてみたいと思いました。（高２K.Y）



写真①交流会全体



写真②アイスブレイク進行の様子

写真③ PBU 会長ブッチ氏

（文責：鈴木隆将）

６．本校卒業のパラアスリートとの交流（ゴールボール体験）

９月 15 日、現役ゴールボール選手の卒業生である川嶋悠太選手（チーム附属）、天摩由貴選手（みなでしこ）、信澤用秀選手（チーム附属）の３名を招き、パラリンピック教育を実施した。この３名はパラリンピックでの代表キャプテンや国際大会で活躍しているパラアスリートで、高等部２年生を対象とした体育の特別授業において、実技指導を担当してもらった。今年度のパラリンピック教育では①パラリンピック等の国際大会で活躍しているパラアスリートとの交流を通じて、スポーツへの興味関心を高める②アスリートが有している「コツ」について指導してもらい、スポーツ動作獲得の気づきを得る機会とする③スポーツ活動を通じて自己実現をしているアスリートの姿から、夢や目標に向かって進んでいく活力を得る、の三つを目的としており、今回は初めて実技指導も交えた形で実施した。

特別授業は二部構成とし、前半部分は２グループに分けて、パラアスリートからボールの投げ方のコツや守備の基本姿勢と応用について直接指導をしてもらった。後半部分はパラアスリートも交えた形で試合を行った。前半部分で教えてもらった技術にチャレンジしてみたり、仲間とゴールを奪う喜びを分かち合うなどゴールボールの本質を楽しむことができた。また、生徒チーム対パラアスリートチームという形式で試合を行い「ホンモノ」に触れることで、パラアスリートたちが積み上げてきた技術の凄さを体感することができた。

生徒たちからは「２時間の授業から、ゴールボールに、仲間と協力してお互いにカバーし合うチームスポーツの良さと、自分で目標を決めて攻撃や守備の技術を高めていける個人スポーツの良さの、どちらの良さもあると感じました。そして、ゴールボールがもっと好きになりました。」「今回の授業でだいぶゴールボールというものを再認識できたと思うし、何より全体を通して仲間たちとやったということもあるだろうが、とても楽しく、時間があっという間に過ぎる感覚がしたので、それだけ自分が満足しているのだなと実感できた１日だった。」といった感想が多く寄せられ、もともとスポーツやゴールボールを好む生徒だけでなく、パラアスリートとの交流を通じて、スポーツから得られる達成感や仲間と喜びを分かち合う心地よさを参加したすべての生徒に味わってもらうことができた。

（文責：山本夏幹）

音声、文字、手話、非言語をフル活用！異文化コミュニケーション

１．本校の国際教育の特徴

本校における国際教育推進事業の目的は、海外の聾学校（フランス・韓国・台湾）との生徒相互訪問交流、オンライン交流、海外企業との連携、海外からの来校者を積極的に受け入れることを通し、国際的資質を育て、これからの国際社会に通用するグローバル人材の育成を目指している。また、卒業後、国際教育推進事業の経験を活かして広い視野に立ち、社会で活躍していくことを期待している。

２．中学部

【韓国国立ソウル聾学校とのオンライン交流】

本校中学部では 2014 年度より韓国国立ソウル聾学校（以下、ソウル聾学校）とオンライン交流を行っている。2015 年度に３年間の国際交流協定を締結し、2018 年度にはソウル聾学校の教員、生徒が来校し、５年間の協定締結の延長を行った。しかし、新型コロナウイルス感染症の世界的な流行により２年間、中断を余儀なくされた。交流の再開に向け 2022 年度から担当教員同士の打ち合わせを始め、今年度は２回のオンライン交流が実施した。

中断前のオンライン交流は、年２回行ってきた。第１回（７月）の交流では、自己紹介や学校紹介等を行い、第２回（12 月）ではオリンピックの話題や、学校生活、年中行事など年度によってそれぞれ独自のテーマで進めてきた。いずれの交流も本校は１年生が対応しているため、交流を始めるにあたり上級生から１年生に向け、前年度の交流の様子の報告や助言を行い、交流の準備を始めた。しかし、今回の交流では２年間の中断により、上級生から交流について引き継ぐことができず、教員によるガイダンスで交流準備を開始することになった。また、今年度は１、２年生合同で第１回の交流に参加することにした。

第１回の交流（７月）では、自己紹介と学校生活や生徒の生活に関する質疑応答を行うことになった。準備では、氏名のハングル表記のカード準備、ソウル聾学校から寄せられた質問への回答準備などを行った。質問への回答では、話す文章を日本語で考え、それを翻訳ソフトで韓国語に直し、韓国語が堪能な方に修正を依頼した。当日は２学年合同だったため１人あたりの話す時間は短くなったが、生徒達が自主的に互いの学校名の手話表現を伝えるなど、密度の濃い交流を行うことができた。

第２回の交流（12 月）では１年生がお互いの国の文化や風習をテーマに質疑応答することになり、同様の準備を行った。日本の伝統的な遊びや衣装、人気があるスポーツや有名人などについて、写真や実物、実演などを交えて伝えることができた。ソウル聾学校の生徒が太鼓の演奏をしたり、伝統的な衣装を着て登場したりして、生徒から「１回目よりも実物や実演がたくさんあり、言葉だけで伝えるよりも分かりやすかった」、「伝統的な遊びでは、タクチチギ、コンギ遊び、チェギチェギ、トウホ（投壺）など日本のものと似ているところもあった（めんこ、おはじき、蹴鞠、輪投げなどと似ている遊びがあった）」、「リアクションをもっとはっきりした方が、こちらが分かったかどうか相手に伝わると思った」、「韓国語が分からなくても、安心して交流できることを（後輩に）伝えたい」という感想があげられた。国際交流協定延長の期待感が高まる、実り多い交流を行うことができた。

（文責：廣瀬由美）

【ソウル聾学校とのオンライン交流の様子】

3．高等部普通科

【フランス国立パリ聾学校とのオンライン交流】

フランス国立パリ聾学校（Institut National de Jeunes Sourds de Paris：以下、「パリ聾学校」）との交流は、平成 15 年の姉妹校協定の締結から始まり、オンライン交流は平成 25 年度より行っている。平成 25 年度のオンライン交流は、本校からパリ聾学校への最初の訪問時に、本校寄宿舎との間で行われた。本校寄宿舎には高等部普通科の生徒も数多く在籍していたが、通学生はこの交流には参加できなかったため、平成 28 年度からは放課後の時間を利用してオンライン交流を行った。その結果、異文化理解やコミュニケーション能力の向上など、オンライン交流を活用した国際交流の効果が示唆された。令和 4 年度は、11 月以降にオンライン交流を 2 回実施した。事前に希望者を募ったところ、第 1 回は 23 名、第 2 回は 25 名の参加となった。フランスと日本の時差は 8 時間（冬時間）であるため、日本時間の 16：30（フランスは 8 ：30）から、 1 時間程度交流を行った。以下、オンライン交流の様子や成果を報告する。

（1）事前準備

令和 4 年度のオンライン交流は、オンライン会議アプリ Zoom（以下、Zoom）を使用して、 2 学期に 1 回（11 月 18 日）、 3 学期に 1 回（ 1 月 27 日）に実施した。

第 1 回の交流では、 2 回ミーティングを行った。 1 回目のミーティングではプレゼンテーションの発表テーマを話し合い、「日本の食事」「日本のスポーツ」「日本の名所」に決め、グループ分けを行った。 2 回目のミーティングでは交流の進行予定を確認し、発表用のプレゼンテーションの進捗を報告し合った。動画共有サービス YouTube を用いて、フランス語とフランス手話を用いた基本的な自己紹介や挨拶表現の動画を視聴した。また、フランス語の学習経験がある教員が、挨拶や日常会話表現などの基本的なフランス語表現とフランス手話表現を指導した。

（2）オンライン交流（第１回 11 月 18 日、第２回１月 27 日）

オンライン交流は、参加者全員が集まれる多目的スペースで、常設されている大型のスクリーンとプロジェクターを使用して行った。通信機器については、本校のコンピュータとパリ聾学校のコンピュータをインターネットに接続し、Zoom のミーティング機能を使用することで交流を行った。Web カメラで発表者を撮影し、内臓カメラよりも広角かつ精細に映すことに配慮した。また、生徒が作成した発表用のプレゼンデータは、Zoom の画面共有機能を使って画面上に映し出した。前年度に参加した生徒から「人数が多く、機材が前面にのみ配置されているので、発表内容やチャットの文字情報を理解しづらかった」という意見があった。また、交流担当教員から「人数が多く、コンピュータ画面、カメラへの距離が遠く、パリ聾学校の生徒に話しかけづらいかもしれない」という意見もあった。今回の交流では、発表者用のコンピュータ１台の他に、２台のコンピュータで Zoom のミーティングに参加し、それぞれを教室の後方の大型テレビに接続し、サブモニターとして使用した。全ての画面で、① Zoom のミーティング画面、②発表用プレゼンデータ、③チャット画面を同時に見られるようにした。チャット画面は主に生徒が意見を交換するために使用し、音声によるやりとりの情報保障ツールとしても活用した。今年度も新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、マスクを着用し、発表者はフェイスシールドを使用した。

第１回の交流では、初めに、本校の生徒とパリ聾学校の生徒が自己紹介をした。本校の生徒はフランス手話の指文字で自分の名前を伝えた後、サインネームを示した。事前に覚えた“Ça vas?”（調子はどう？）や“Merci.”（ありがとう。）の手話をすると、パリ聾学校の生徒が笑顔で反応する様子に喜ぶ姿が見られた。次に本校の生徒がグループ発表を行った。「日本の食事」のグループは、寿司や天ぷらなどの日本の伝統的な料理を紹介し、生徒自らの弁当の写真を見せ、身近な食べ物や日常の食生活についても紹介した。パリ聾学校の生徒から“Why do you always eat rice?”（どうしていつも米を食べているの。）や、本校生徒はチャット機能を使って英語で“Because it's tasty.”（おいしいからだよ。）と答え会話を楽しむ姿が見られた。

第２回の交流で本校生徒が「日本の名所」について発表をした。パリ聾学校の生徒も「パリの名所」について発表した。本校生徒からは“How many times have you been there（Eiffel Tower）?”（エッフェル塔に何度登ったことがあるの？）“What are famous sweets in Fracne?”（フランスの有名なスィーツは何？）とチャットを通して様々な質問が挙がった。交流の後半にパリ聾学校の生徒から“Which do you prefer Paris Saint Germain or Olympique de Marseille?”（パリサンジェルマンとオリンピック・マルセイユとどっちが好き？）との質問をきっかけに、サッカーの話題が盛り上がり、本校生徒がサッカー選手の真似をジェスチャーですると、パリ聾学校の生徒から喜びの様子が伝わってきた。

（３）まとめ

オンライン交流実施後、Microsoft Forms を使用した選択式の質問と自由記述の電子アンケート調査を参加者に実施した。選択式の調査の結果、国際交流に対して積極的な回答が多く、実際に現地に行きたいと回答する生徒が非常に多かった。

自由記述では、「自分の発言に対して、パリ聾学校の生徒が自分と同じ手話表現で返してくれたので、思いが伝わったと感じられ嬉しかった」「PowerPoint で作成したスライドにより、相手の伝わりやすい発表ができた」「チャットで英語での会話が成り立ったことが嬉しかった」など、自分の働きかけに対し、相手校の生徒から反応があったことで、やりとりが成立したことを実感し、喜びを味わえたという記述が多く見られた。交流の様子や事後調査の結果から、オンライン交流を通して、生徒が自分と異なる言語や文化、生活様式についての関心が高まったことが示唆された。また、自らの外国語学習についても振り返るきっかけとなり、学習方法の改善や、今後のさらなる学習に意欲を示す生徒も確認された。

オンライン交流では、大人数で交流の機会をもつことができる。その一方で、大人数であると遠慮をして発言や質問をしづらくなる生徒、本校生徒とパリ聾学校の生徒とのやりとりの速さに追い付けない生徒がいることが問題となった。Zoom のミーティングに参加する本校のコンピュータを増やし、コンピュータ１台に対して 10 名程度で Zoom に参加することで、一人一人が視覚情報や文字情報をより得やすくなった。これにより、生徒同士で相談しながら英語の質問を考え、代わるがわる発問し、自由に発言しやすくなったようだ。今後も、生徒一人一人のニーズに耳を傾けて、生徒が主体的に相手校の生徒と交流できる環境を設定し、ICT 機器を柔軟かつ効果的に活用していきたい。

（文責：澤口真弓、田中豊大、田万幸子、久川浩太郎）

４．高等部専攻科造形芸術科 生徒作品を通しての台湾の聾学校との 国際交流活動

（1）概要

造形芸術科では臺北市立啓聰學校、臺南大学附属啓聰學校と平成 29 年度より美術作品による交流を行っている。コロナ禍で直接訪問しての交流が難しい中でも、各校の生徒たちの思いが込められた作品はネットワークを介して届き鑑賞し合うことができる。

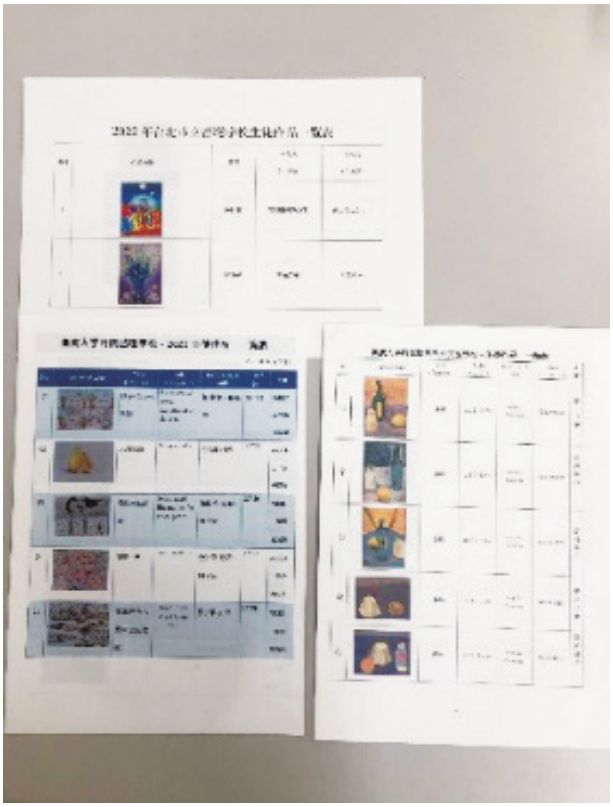
さらに、今年度で 4 回目となる日台聾学校美術交流展を 1 月 20 日から 22 日まで、市川市芳澤ガーデンギャラリーにおいて造形芸術科卒展と合同で開催し、100 名以上にご来場いただいた。

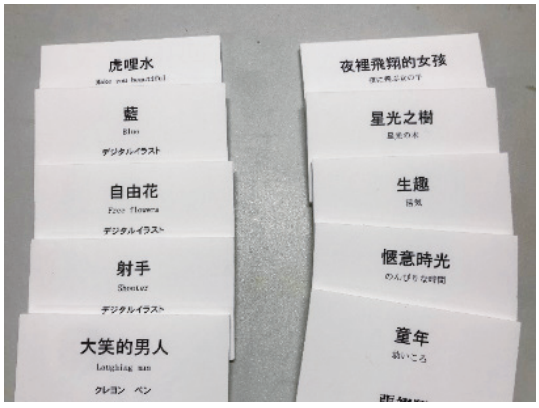
（2）作品画像の交換と展覧会準備

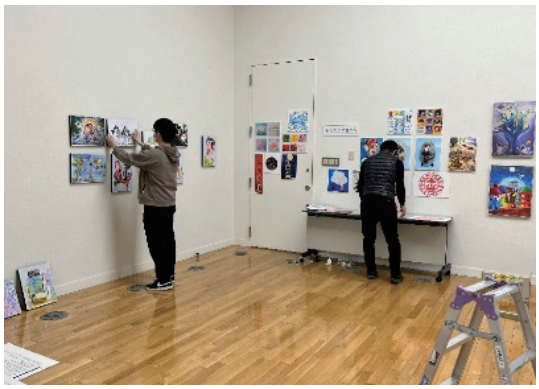
台湾両校に作品画像の提供を依頼するとともに、本校からも生徒作品画像を準備している。送付作品リストに記載する作品タイトルは、ニュアンスがより伝わりやすいように原題（日本語）と作者の生徒と教員で相談した英語訳を併記した。

作品画像はオンラインストレージを利用して交換しているが、これにより、質感や色合いなどができるだけ再現された質の良いファイルで届け合うことが可能となっている。

展覧会に際しては、台湾から届いた作品画像を本校で出力し展示可能なパネル形式に整える。また、２か国語（繁体字中国語の原題と日本語訳または英語訳）のタイトルを併記したキャプションも作成して掲示している。これまでの交流紹介から始まる会場は、生徒と教員が一緒になって展示作業を行う。生徒は、展示壁面でのバランスや見やすさを考慮しながら教員と相談し、スムーズに作業を進めていた。







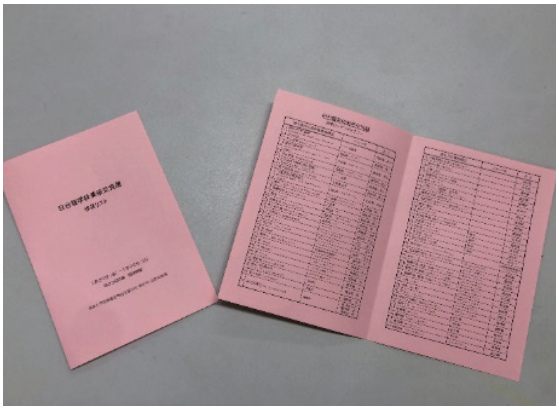
（3）展覧会の様子と振り返りについて

展示期間中は、多くの来場者が目録を手にじっくりと鑑賞する様子が見られ、展示作品への高い関心を感じた。

来場者から寄せられた感想および本校生徒たちからの感想は台湾の両校へフィードバックしているが、今回は造形芸術科の生徒から、作品の制作過程や技法についての質問があった。そちらも併せて台湾へ届け、新たな交流のきっかけにすることも考えたい。

美術作品を介しての国際交流は、それぞれの感性と文化の共通点・相違点について、深く興味を持ちやすいテーマであると感じている。今後も、幅広く日本と台湾の生徒作品を鑑賞できる展覧会として、継続していきたい。

（文責：玉生美智子）



【日台聾学校美術交流展】

附属大塚特別支援学校における国際教育の取り組み

１．本校の国際教育の特徴

本校の国際教育の目的は、幼児児童生徒が自国や他国の文化に興味をもち、大切にしようとするとともに共に学び合うこと、教師が自国や他国の文化を尊重しながら互いの教育力を高めることである。

特に今年度はじめには知的障害教育における外国語教育の推進として外国語教育についての授業研究を進め、指導計画のモデルを蓄積すること、海外の特別支援学校との研究交流を推進し海外の特別支援学校と交流する際の指導上の配慮等を検討することの２点を進めていくことを確認した。

２．ALT（Assistant Language Teacher）による外国語（英語）学習

本校では今年度も継続して ALT による外国語（英語）学習に取り組んでいる。年度初めには本校に継続して来校している ALT と年度初めの打ち合わせを実施した。大まかな幼児児童生徒の実態を伝え、年間の指導計画の見通しを共有した。また昨年度からの継続した取り組みとして学期ごとに本校職員と ALT とで子どもの実態や、指導内容について振り返りミーティングを実施している。

振り返りミーティングの内容について、分掌内で確認し日々の指導にも還元していった。

１学期末 ALT との打ち合せの中で「学年それぞれの楽しみ方を深めていく」ことが重要であるとの意見がでた。知的障害教育において幼児児童生徒自身が「楽しい」「やってみたい」と感じなければなかなか学習にはつながらず、動機づけの側面が非常に重要である。

筆者が担任しているクラスでは、英語の時間に流れた曲（Hello Song for kids）について、「英語でやった How are you ってなんて曲だっけ？」と教員に確認し、休み時間にタブレット端末を用いて動画サイトで検索して曲を探して楽しむといった様子が確認された。また ALT との関りは限られた回数であることを確認しながら、「次は（ALT の名前）先生いつくるのかな？」「今月は（ALT の名前）先生との勉強あるね」などと関りを楽しみにしながら学習に取り組むことができた。また２学期も１学期からの継続方針として Writing よりも Reading を重視した英語学習に取り組むことを確認した。

ALT による外国語活動（英語）

２学期末の打ち合わせでは、「英語に興味をもっている幼児児童生徒が増え、全体的に成長を感じた。」との意見があった。１学期の授業では、おとなしく間違えたくないといった気持ちから発言が少なかった生徒も２学期の取り組みから英語の授業を楽しもうとする様子がみられた。より Reading やコミュニケーションを重要視した学習を設定することで、英語に興味をもち単語を覚えたり、アウトプットしようとしたりする生徒が増えたとの話があった。

３．Casa da Música 財団との音楽を通した交流

公益財団法人 東京都歴史文化財団　東京文化会館の協力により、ポルトガルの Casa da Música による音楽ワークショップを本校で実施した。

今回の音楽ワークショップは、スキルや知識を獲得することが目的ではなく、教員も含めた参加者全員が音楽をつくりあげる喜びや、だれかと一緒に表現する喜びを楽しむことが重要である。

当日は東京文化会館に所属するワークショップリーダーも一緒に参加しながら、身体表現・楽器演奏・歌唱を軸としたワークショップが中学部・幼稚部、小学部、高等部の各 45 分ずつの３回実施された。各回において参加者の発達段階に合わせてワークショップの内容を調整することで、参加者全員が身体を使った音楽表現を楽しんでいた。

Casa da Música との交流（身体表現）

Casa da Música との交流（楽器表現）

Casa da Música との交流

４．音楽を通した交流の事前・事後学習

知的障害のある児童にとって、生活経験と関連した学びの機会は非常に重要である。今回 Casa da Música との交流の事前、事後学習を通して他国の文化に触れる学習を設定した。

事前学習では、ポルトガルの国旗や食文化について PowerPoint 資料を提示したり、Google earth をもちいてポルトガルの Casa da Música を実際に調べたりした。また本校の栄養教諭に月に一度設定されている「世界の料理」はポルトガルの郷土料理で献立を依頼した。

その結果、自宅でタブレットを活用して、ポルトガルはスペインの隣にあるということを自発的に

調べたり、文字の読み書きが苦手な児童がポルトガル料理の名前をホワイトボードに書いたりする様子がみられるなど、主体的に学習に取り組む様子が観察された。

給食　ポルトガル料理の日

加えて事後の活動では、交流当日に実際会話をしたCasa da Música所属のポルトガル人アーティストの名前をカタカナでホワイトボードに記入する、また音楽一緒にやりたいなといった発言が見られた。

５．中学部・高等部による交流の実際

交流会では、Casa da Músicaの方々に日本の伝統文化を体験できるように手話や童歌などを披露した。中学部では、「世界が一つになるまで」、高等部では、「あんたがたどこさ」（肥後手まり唄）を実施した。最後に、各学部に別れて、Casa da Músicaの方々と一緒に記念撮影をした。Casa da Músicaの方々や本校の生徒達も楽しく交流している様子が多く見られた。

Casa da Música と中学部・高等部の交流

６．令和４年度　附属大塚特別支援学校における国際教育関連学習の成果と課題

知的障害のある幼児児童生徒にとって学習への動機づけの観点は重要である。自国や他国の文化に興味をもつために、好みの活動である音楽、身体表現、食事などを組み合わせて指導することの有用性を改めて確認することができた。

さらに、外国語（英語）学習に興味をもちそこから自身の学習につなげていくためには幼児児童生徒の実態に合わせた教材を設定することに加えて、興味関心が向いたときに幼児児童生徒自身がアクセスしやすい環境を整えることが重要であると考えられる。今年度の場合は１人一台の端末を使用し、英語学習で扱った音楽を動画サイトで閲覧できるようにしたり、ポルトガルの国を扱った学習の後には、教室の端末で、Google earth を操作できるようにしたりした。

次年度は学習した外国語の力を学校外の場面で発揮できる場面を設定することが必要であると感じ

ている。令和４年度の２学期には ALT とのつながりを活用し、外国の人と英語を用いてコミュニケーションする学習機会を設定することを予定していたが、諸事情により中止になってしまった。

知的障害のある幼児児童生徒が楽しみながら学習して身に付けた力についてより適切に発揮するためには、必要な準備や機会についてさらなる検討を進める必要がある。

次年度以降も継続して知的障害のある幼児児童生徒にとって外国語を用いたコミュニケーションを体験するための計画や事前事後の学習の在り方を深めていきたい。

（文責：１～４、６　森澤亮介、５　飯島　徹）

国際教育の火を絶やさぬよう、校内で活動を続けた

１．本校の国際教育

附属桐が丘特別支援学校では、国際的視野で物事を捉えようとする姿勢と、積極的に自己発信しようとする意欲のある児童・生徒の育成を目標に掲げ、国際教育の実践を全校で行っている。

本校の国際教育活動としては、長らく韓国・広州セロム学校や台湾・国立南投特殊教育学校及び国立和美実験学校と国際交流協定を締結し交流事業を行っていた。しかし、長引くコロナ禍で、満足に活動できていない。

海外渡航が難しい状況でも、国際教育の火を絶やさぬよう、校内で活動を続けた。

２．活動報告

（1）高等部生徒と筑波大学大学院教育研究科教員研修留学生との交流

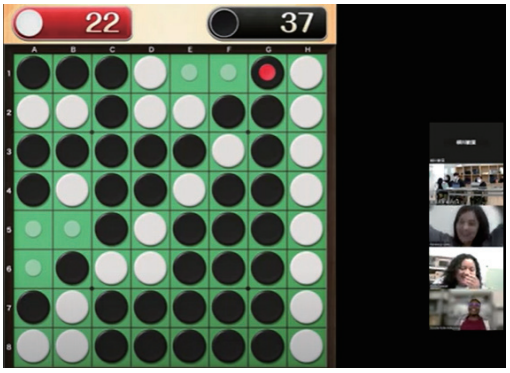
令和４年 12 月 13 日５・６校時に高等部生徒と筑波大学大学院教育研究科教員研修留学生との交流を総合的な学習の時間において実施した。昨年同様、事前打ち合わせや当日の交流には、オンライン会議システム Zoom を利用した。

生徒には以下の目標を提示した。「様々な活動を通じて、留学生や友達と心が一つになること（＝相手のことが身近な存在に感じられるようになる。相手の気持ちや考えが推察できる。別れが惜しいことやもっと一緒にいたいと思う気持ちになる等）を体験することができる」「これまで知らなかった世界各地の文化について知ることができる」「言葉、ジェスチャー、絵等を活用して自分が伝えたいことを表現することができる」

初回の９月 13 日には、当日どう交流するか高等部第２、３学年が３グループに分かれて話し合った。10 月 25 日に、オンラインで留学生と顔合わせをし、グループごとに当日の打ち合わせをした。このとき、留学生には各国の子どもたちの伝統的な工作、遊び、お菓子、踊りについてスライド作成を依頼した。11 月 22 日に、附属坂戸高校との交流を終えた第１学年が合流し、準備の仕上げをした。「総合的な探求の時間」に、留学生に伝わる説明づくりを意識して準備した。

（写真１）

当日、Aグループは盆踊りを一緒に踊った。Bグループは日本のアニメをテーマにイントロクイズをしたり、留学生のスライドを見せてもらったりした。(写真１)また、高等部生徒の１日を紹介し、質疑応答した。Cグループは、留学生に日本のゲームを紹介し、オセロを対戦した。いずれのグループも、よく準備し、和やかに展開した。また、当校生徒は、留学生がマスクを外して臨んでくれたこともあり、表情がよく見えて会話しやすかった様子だった。



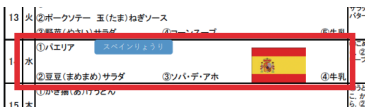
(写真２)

(写真３)

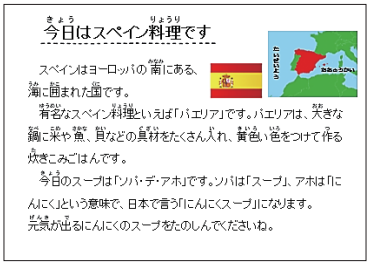
(２) 給食を通した各国料理の体験

今年も給食で、世界の料理が出された。なかなか海外に行けない当校の児童・生徒が世界を身近に感じられるようにと献立に取り入れられている。９月 14 日には「ソパ・デ・アホ」というニンニクのスープが出された。(写真４、５)栄養教諭は「アホとはニンニクのことだが、響きが面白いので、児童・生徒の反応が楽しみだった。予想通り笑ってくれた」と話していた。

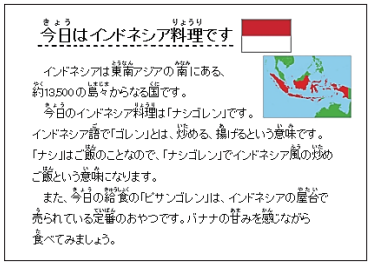
インドネシアの屋台で売られる定番のおやつだという「ピサンゴレン」や、ベトナムのサンドイッチ「バインミー」も経験した。(写真６、７、８、９)肢体不自由のある当校の児童・生徒が、東南アジアへ行き、現地の屋台でおやつを食べるハードルは高い。まして、修学旅行のように一斉に渡航し、同じ食経験を積むことはさらに難しい。給食を通して、学校全体で同じ異文化体験ができるのは貴重な機会である。



(写真４)

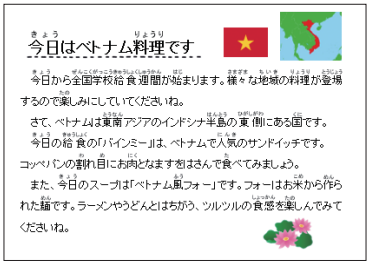


(写真５)



(写真６)

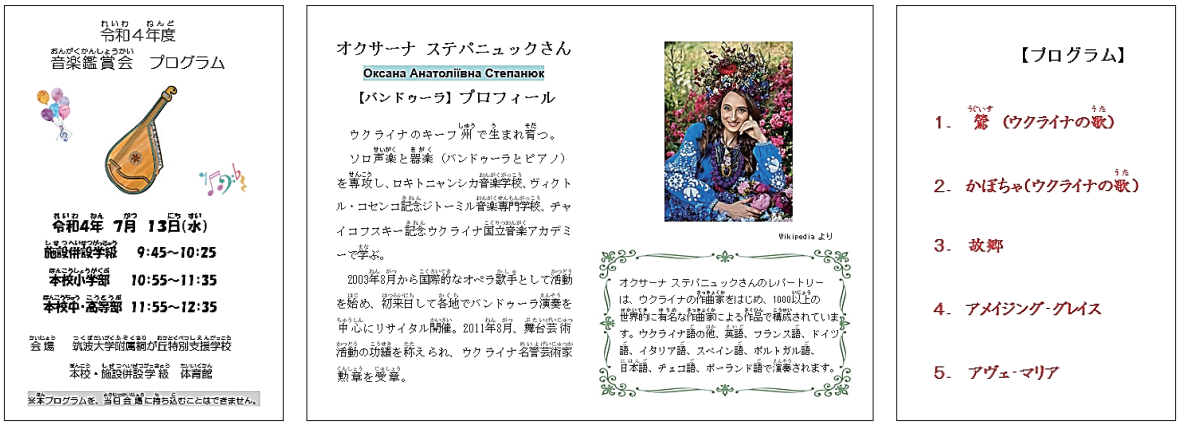
(写真７)



(写真８)

(写真９)

ベトナム料理のメニューで出されたピサンゴレンは、学部を問わず好評であった。ある小学部６年生は、卒業前にもう一度食べたい給食としてピサンゴレンをリクエストした。また、ある高等部１年生は、バナナにホットケーキミックスの衣をつけて粉砂糖を振りかけるという、経験したことのない甘さに目を白黒させつつも味を楽しんでいた。感染症対策のため黙食が続く給食だが、それぞれが心に残る体験をし、家庭でも思い出を分かち合ったようだ。



（写真 10）

（3）音楽鑑賞会でコロラトゥーラ・ソプラノとバンドゥーラ演奏を聴く

令和４年７月 13 日に、「多様な文化や芸術に親しみ、美しいものや優れたものに触れることによって豊かな情操を育てる」というねらいのもと、音楽鑑賞会が催された。（写真 10）当日は、オクサーナ・ステパニュックさんが本校と施設併設学級の小中高等部で全３回、歌唱・演奏した。氏は、ウクライナ出身のコロラトゥーラ・ソプラノ歌手であり、世界を代表するバンドゥーラ奏者である。（写真 11）

ウクライナの民族楽器であるバンドゥーラについての説明や、「ウクライナでは、好きな人には刺繍を贈り、嫌いな人には大きなかぼちゃを贈る」という演奏曲にちなむエピソード等が紹介され、児童・生徒は興味津々な面持ちで話に耳を傾けた。（写真 12）

（写真 11）

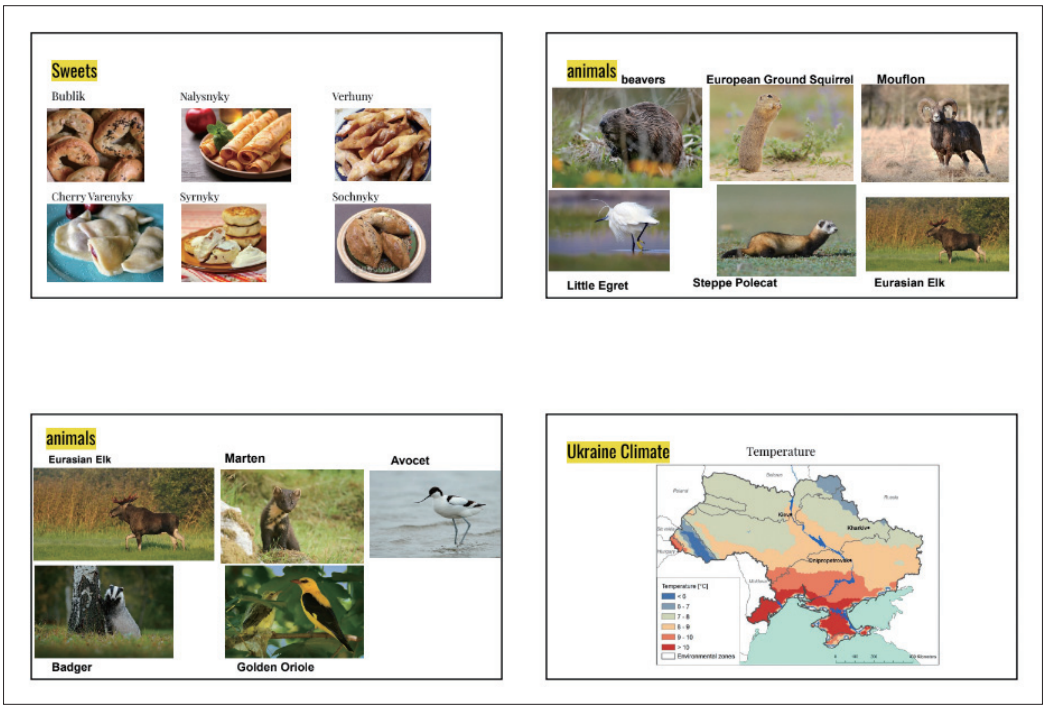
（写真 12）

Amazing Grace が英語で披露された際には、５か国語を話す氏から「皆さんにとって外国語は大事だと思います。英語を勉強してください。努力してください」と本校の中高校生に激励の言葉があった。

参加した生徒の１人からは「やっぱり『故郷』がいい」と感想が出された。迫力ある演奏や異なる文化に触れる経験を通して、日本の歌のもつ良さや、「故郷」が描く普遍的な郷愁に感じ入ったとのことだった。

（4）高等部生徒とウクライナ避難民の留学生との交流

令和５年３月 20 日に高等部第１学年Ｉコースの生徒がウクライナ避難民の留学生と交流する。ウクライナより避難し、群馬大学の学生となった同年代の人と Zoom をつなぐ。外国語科（英語）「英語コミュニケーションⅠ」の授業で福島県立郡山支援学校の第１学年６名の生徒とウクライナについて調べ、Google Slides を共同編集し、情報を共有した。（写真 13）郡山支援学校とは Zoom で遠隔合同授業をつなぎ、当日、留学生に質問する内容を準備している。（写真 14、15）



（写真 13）

（写真 14）

（写真 15）

３．児童・生徒の変容

コロナ禍にあっても授業や給食、行事等の機会を工夫して児童生徒は、細々とではあるが国際的な経験を積んできた。ある中学部の生徒は、留学への憧れを強く抱き、令和５年１月 27 日に念願かなってアメリカで 10 日間のホームステイをした。現地では、緊張しつつも何とか英語でコミュニケーションをとり、最後には「日本に帰りたくない」と思ったという。補装具を使い独歩する生徒だが、現地ではディズニーランドのキャストが自然と手を差し伸べてくれる等、バリアフリー環境の違いも体感した。

「百聞は一見に如かず」というが、児童・生徒が海外渡航できる日々が戻るよう願い、校内での研鑽を続けたい。

附属久里浜特別支援学校の国際交流

１．本校の国際教育の特徴

本校は、例年、海外から多数の視察を受け入れ、授業や子供たちの活動の様子を実際に見てもらい、時には子供たちと一緒に遊びや活動を通して触れ合う機会としながら、国際交流を行ってきた。しかし、新型コロナウィルス感染症が世界的に蔓延し、海外からの視察や見学が中止され、来校者と関わりをもつことができない状況が続いてきた。今年度は、海外から日本へ入国する際の水際対策が緩和傾向であることを踏まえ、感染症対策の徹底を図りながら、海外からの来校者の受け入れを段階的に再開することを目指したい。

また、海外からの来校者との交流に加えて、本校から海外の知的障害特別支援学校等に働き掛け、オンラインでの交流を推進し、国際教育の実践の充実を図りたい。本校は知的障害を伴う自閉症児を対象とした幼稚部・小学部を設置した学校であり、幼児・児童の実態を踏まえると、オンラインで子供同士の活発な交流を行うことは難しい面がある。今年度については、オンラインでの教職員間交流を主とし、お互いの教育活動に関する実践紹介や意見交換などを実施した。

２．活動報告

（１）受け入れ型研修

令和４年11月21日、JICA（独立行政法人国際協力機構）における研修の一環で、コロンビアやボリビア、コスタリカなど南米を中心とした７カ国から研修員７名が来校した。主な研修内容は、本校の概要説明や学校見学、授業参観などであった。

写真１　校内を見学する様子

午前中の学校見学では、校内施設や各学級の教室環境を中心に見学した。自然豊かな環境の中、屋外プールや遊具のある広場、体育館などの施設に関する説明を受けながら、熱心にメモを取られていた。また校内の季節や行事に関連した掲示物に興味を示されたり、幼児児童が活用している教材・教具の指導法について熱心に質問されたりしていた（写真１～３）。

写真２　学校施設を見学する様子

写真３　教室環境を見学する様子

その後、幼稚部りす組（４歳児学級）と小学部２年生の授業参観を行った。幼稚部りす組では、生活に関する遊び「芋掘り遊びをしよう」の活動を参観した。教師や子供たちが、芋掘りの歌を歌いながら、布製の芋のおもちゃのツルを引っ張って芋掘り遊びをする様子を見て、笑顔で拍手をする様子が見られた。芋を使ったおやつ作りでは、幼児が三角巾とエプロンを着用して、意欲的に活動に向かう様子を興味深く参観されていた（写真４、５）。小学部２年生では、いきいきタイム「掃除をしよう」の授業参観を行った。自分たちの教室をきれいにするために、授業の中で掃除を扱うことに対して文化の違いを感じられたようであった。掃除用具のイラストや、手順や場所を分かりやすくするための手掛かりを活用しながら掃除する実演動画が映しだされたスライドを熱心に視聴されていた。教室内では、児童が床拭きワイパーや雑巾を使って意欲的に掃除をする様子を参観された（写真６、７）。

写真４　幼稚部の授業参観の様子①

写真５　幼稚部の授業参観の様子②

写真６　小学部の授業参観の様子①

写真７　小学部の授業参観の様子②

午後は本校の学校概要や各学部概要の説明をした後、質疑応答を行った。概要説明ではスライドや映像を見ながら、熱心にメモを取られていた。質疑応答では、本校の教育課程や指導方法、指導体制などについて、いくつも質問が上がった。その他、特別支援教育の教師の資格や経験、インクルーシブ教育に対する取組、研修制度などについて意見交換を行った。我々も様々な国の人々と情報交換をすることを通して、日本と海外の教育制度の違いや、障害のある子供たちを指導する上で大切にされていることの共通事項などを知ることができた（写真８、９）。

感染症対策のため、以前のように海外から来校された方々が、幼児児童と一緒に給食を食べたり活動に参加したりして交流を深めることは難しかったが、幼児児童がいきいきと活動する様子を実際に見たり、簡単な挨拶の言葉を交わしたりして交流することができた。今後も、積極的に海外からの研修を受け入れ、本校の研修視察プログラムの充実を図るとともに、幼児児童が海外や海外の方々に親しむ機会を設定していきたい。

写真８　学校概要説明の様子

写真９　記念撮影の様子

（２）中国蘇州工業園区仁愛学校との交流

中国江蘇州省に所在する蘇州工業園区仁愛学校は、蘇州工業園区初の特別支援学校として、2012年９月に設立され、2017年には設備が充実した新校舎が建設された。知的障害と自閉症、肢体不自由のある子供を教育対象としており、幼稚部から高等部まで設置され、自閉症学級を設定している。また、日本やイギリスで特別支援教育等について学んだ人材を積極的に登用し、専門分野を活かしたエキスパートチームを編成し、学校運営にあたっている特色がある。

仁愛学校と本校は、2014年から2019年まで国際交流協定を締結し、教員が相互に訪問して交流を重ねてきた。新型コロナウィルス感染拡大の影響により、交流活動は中断していたが、オンラインを活用し、授業研究会や研修会を実施することで、交流を再開し、姉妹校協定を再締結することとした。

①　教員間の交流

中国のリモートワークアプリケーション「Ding Talk Lite」を使用し、オンラインでの交流を進めている。仁愛学校における国際交流の窓口兼通訳である唐妍教諭と、双方の学校の現状や課題に関する情報交換を行い、今後の交流の方向性について検討を重ねた。試行的に翻訳機能を活用しながら、複数の教員間でやり取りしながら、教員間での活発な交流方法を模索中である（写真10）。

写真10　オンラインでの交流の様子

②　姉妹校協定締結式

令和４年11月17日、オンラインで姉妹校協定締結式を実施した。双方の管理職等の職員の自己紹介や、事前に翻訳した学校紹介VTRの視聴を行った。仁愛学校範里校長と本校伊藤校長が協定書に署名し、姉妹校協定の締結を行った（写真11～13）。

写真11　締結式での記念撮影の様子

写真 12　本校における締結式の様子

写真 13　学校紹介 VTR 視聴の様子

③　研究会への参加

令和 4 年 11 月 25 日、仁愛学校の創立 10 周年を記念して、中国全土を対象とした自閉症児研究会が開催された。「より良い生活に向けた自閉症児童教育の新たな探求（日本語訳）」のテーマのもと、オンラインで中国全土から教職員が集まり、中国における自閉症教育への関心の高さが伺えた。仁愛学校から事例提供の依頼を受け、本校遠山教諭が小学部 2 年生児童の事例「スケジュールボードを活用した家庭との連携」を発表した。また、12 月 2 日に開催した本校の自閉症教育実践教育協議会や令和 5 年 2 月 25 日に実施した筑波大学公開講座「自閉症児のアセスメント」についても、仁愛学校の教職員が受講者としてオンラインで参加した。今後も、双方の研究会への参加等を積極的に行い、双方の教育実践の理解を深めていきたい。

（3）中国達敏学校との交流

中国浙江省寧波市に位置する達敏学校と本校は、これまで教員が相互に訪問して交流を重ね、日中両国の自閉症教育について情報交換を行ってきた。加えて、達敏学校からの研修生を受け入れ、知的障害を伴う自閉症児に特化した教育課程や効果的な支援方法について講義を実施してきた。

新型コロナウィルス感染拡大の影響により、交流活動は中断していたが、「両国の特別支援教育を発展させるために今後も深く協力したい」旨の連絡があった。加えて、杭州市で開催予定の第 19 回アジア競技大会に向けて、児童生徒同士の交流も充実させたいという強い要望があった。

これを受けて、年度途中で赴任した陸雪萍校長からも、姉妹校の再締結やオンラインでの教員間や児童生徒間の交流についての要望を確認し、姉妹校協定の再締結と併せて協議を進めている。2023 年に開催を控えたアジア競技大会に向けて、応援動画の作成や競技の模擬体験等を行う中で、児童生徒同士の交流も充実させたい。こうした交流は日中友好の観点からも有意義な効果が得られると期待される。

5. 各附属学校のイングリッシュルーム活動

附属小学校

子どもたちの充実した国際理解教育に向けて

① 活動報告１　留学生との交流会

小学校では、筑波大学に在籍している留学生との交流を継続して行ってきた。本年度は、11 月と 12 月に、フィリピン、ミャンマー、オマーン、ブラジル、アルゼンチン、グアテマラから来日している筑波大学の留学生との交流会を対面で実施することができた。この交流では、英語を使ってコミュニケーションを図ることができる貴重な場であるとともに、自己紹介や質問タイムを通して留学生との関わりを深めたり、他国の様子を実際に聞いて異文化理解につながる機会ともなっている。

② 児童生徒の感想

・Hnin さんの出身国であるミャンマーの文化をしることができて面白かった。英語が話せると世界の人とつながることができると分かった。自己紹介や質問をすることができてよかった。
・楽しかった！質問を聞くと丁寧に返してくれて、スムーズに会話ができた。また、スペイン語をプレゼンで教えてくれて、とても楽しい時間になりました。またやりたいです。
・自分の伝えたいことは日本語では言えるが、英語におきかえると難しかった。なので、もっと英語を勉強し、自由に英語をあやつりたい。
・最初は緊張しましたが、質問タイムや自己紹介の時にはコミュニケーションをとることができてよかったです。留学生の英語は理解することができて、福笑いではヒントを伝えられました。
・６年生になって、５年と比べると表現できることがふえたので、うまく表現して留学生との交流を図ることができた。
・とてもフレンドリーで、色々なことを教えてくれました。アルゼンチンの国について知ることができました。すごい楽しかったので、またやりたいです。
・自己紹介の時に、I like Japanese castles. と言ったら、Japanese castles are nice. と返してくれて嬉しかった。自分の国の説明をしてくれた時、自然やサッカーについて説明してくれて、楽しかった。

③ 活動報告２　ALT とのイングリッシュルーム

ALT の先生とのイングリッシュルーム（Lily's room）を開設し、中休み、昼休み、放課後の時間に１年～６年までの交流したい希望者を募って実施した。本年度は低学年の利用が多く、１年生でも英語に触れながら楽しく ALT の先生と活動する様子がみられた。小学校で英語の授業がはじまるのが３年であるが、低学年が積極的にリリー先生と関わりをもち、英語に触れる機会をつくれたことは成果であった。授業以外に、気軽に交流を図れる場として今後も取り組んでいきたいと考えている。

④　児童の感想

・英語の本や動画をみて一緒に楽しむことができた。
・リリー先生とこの時間に交流するのがとても楽しみです。短い時間だけど、楽しいです。
・英語を使って、ゲームをしたことがとても楽しかったです。音楽を聴いて、歌ったりすることもあり、だんだん歌えるようになりました。
・友達と一緒に英語を話すことができるので楽しみにしています。時間があったら、友達を誘ってくるようにしています。

附属中学校　イングリッシュルームの活用報告

① 新型コロナウイルス感染症対策を講じながら従来通りに実施

昨年度までは、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により断続的な休校を余儀なくされたが、その期間は Zoom によるオンライン形式でイングリッシュルームを継続実施していた。今年度は、感染が落ち着いてきた状況を鑑みて、感染対策を講じながら通年で対面形式での開室をすることができた。基本的な実施形態は、以下のとおりである。

・前期は週１回（水曜日）、後期は週２回（火・水曜日）、放課後に開設する。
・開室中は通常授業の Team-teaching の時間担当の ALT が常駐する。
・利用時間は１枠 15 分交代、利用人数は１枠２名までを原則とする。
・生徒は部屋の扉にある表に名前を記入して予約する。
・来室した生徒を毎週記録しておく。
・１年生の利用は５月中旬からとする。
・アメリカ留学短期プログラムの写真や参加者レポート、その他国際関係のチラシやポスターを部屋の外に展示している。

小学校における英語の教科化を踏まえて、１年生の開始時期を以前より早めた。当初は１年生の参加状況を心配したが、予想以上に多くの１年生が参加し、ALT との英語でのやり取りを楽しんでいた。あわせて、授業での発表活動の練習やライティングの添削に訪れる生徒もおり、活用の幅が広がっている。アメリカ短期留学プログラム参加者決定後は、留学準備のために留学参加者が利用することが増えた。

参加者履歴よると、繰り返し利用するリピーターが多い傾向がある。今後はより多くの生徒に利用してもらえるように、授業等で声がけをしていきたい。

② 生徒の感想

・部活の合間を縫って何回か行った。１年の初めは ALT の先生が何をおっしゃっているのかわからなかったから、英語力のある人と一緒に行って助けてもらっていたけれど、やっているうちに文の組み立て方などがわかるようになり、徐々に楽しくなった。（１年生）
・「お茶」や「趣味」などの話をした。楽しく学べたのでよかった。（１年生）
・１年生のときは１回しか行かなかったけど、今年度は６～７回行った。ALT の先生がトピックカードを準備していてくれるので、その中から選んで話す話題を決めている。授業よりも英語を聞いたり話したりする機会が多いので、慣れてくるととても楽しい。３年生になっても引き続き利用したい。（２年生）
・ALT の先生とお話している中で、「あぁ、こう言いたいのに言えない！」という瞬間があり、それが普段の英語学習のモチベーションになっている。授業内スピーチの後に ALT から質問されるときに、イングリッシュルームの効果をよく感じる。（２年生）
・１年生の時は行きたくないと思っていたけれど、親のすすめや一緒に行ってくれる友だちがいることもあって、２年生になってよく利用するようになった。実際にやってみたら、ALT の先生は優しいしとても面白いので良かった。この前、神社で海外の方に話しかけられたときに英語でやり取りすることができたのも、イングリッシュルームで英語に親しんでいたからだと思う。（２年生）

附属学校のイングリッシュルーム活動について

（１）附属高等学校

①活動報告

本年度は、まだまだコロナ過ではあるが、活動自体に大きな制限を加えることはなく実施することができている。主な活動としては、以下の２つを行った。

１．マクレイ先生（附属中学校のイングリッシュルームも担当）による英語指導

前期木曜日の放課後、各国際交流プログラムに参加する生徒に対して、対面による研修を行った。また、前期および後期の木曜日と金曜日の放課後、金曜日の昼休み及び５，６限目（選択授業のない３年生向け）には、１コマ 20 分で生徒がマクレイ先生と英語の練習をお願いした。

今年度より、Sandford 大学による高校生向けの online 授業への参加を希望する生徒に向けの email による英文添削も行った。Stanford e-Japan という授業に参加するためには、書類審査を通過しなければならず、提出する英文エッセイを email にて添削を行ってもらった。

２．ボブ先生（本校ＡＬＴ）による英語指導

主に火曜日の放課後、本校の英字新聞部の活動に参加をお願いした。本年度は英字新聞を発行していないが、活動日には洋画を視聴して英語による議論を行ったり、部員による debate を行った際に、指導をしてもらった。

以上のように、今年度「イングリッシュルーム」を活用した生徒の目的は以下のように分けられる。

・国際交流事業への参加が決定した生徒の準備（１，２年生）
・大学入試に向けた英語のエッセイの添削、及び英語面接の練習（３年生）
・Stanford e-Japan に申し込む書類の添削（１年生）
・「英語論理・表現Ⅰ」の授業で行うスピーチの原稿の添削とスピーチ練習（１年生）
・英語の運用能力を伸ばすため（１～３年生）

②生徒の感想

昨年度同様に多くの生徒が「イングリッシュルーム」を活用した。（R5.1 月現在イングリッシュルームへの参加延べ人数は約 45 人）英字新聞部の生徒が、放課後ボブ先生を迎えに来る姿が多々見られた。活用した生徒の一人は、「英語の資格・検定試験や大学入試の英作文・面接対策のために利用しました。ネイティブスピーカーの先生と話すことのできる貴重な場でした。」と感想を述べていた。

③今後へ向けて

次年度からは、海外渡航を含めたコロナ以前のような国際交流活動が予想される。英語で十分に活動を行うことができるように、授業外でも生徒が個々の目的に合わせて英語を使用する場があることがとても大切となる。実際に使える英語力を伸ばしたいと考える本校生にとって、「イングリッシュルーム」がもたらす役割はとても大きい。生徒が安心して生きた英語に触れあうことのできる「イングリッシュルーム」を次年度もぜひとも実施し、最大限、生徒の学習をサポートしていきたい。授業を通して英語の発信力を高めることは必須であるが、授業外でも生徒が個々の目的に合わせて英語を使用する場があることがとても大事であり、「イングリッシュルーム」がもたらす役割はとても大きいと言える。

日常活動および海外研究発表とその先の支援

1．活動報告

本校のイングリッシュ・ルームは 2013 年にスタートした。月に 2 回ほど、放課後 3 ：30 ～ 5 ：00 に東大大学院の留学生に来てもらい、それぞれのご専門について語ってもらったり、語学部が英語ディベートのコーチを受けたりしている。（もちろん、希望者が参加することも可能である）

また、台湾・釜山への生徒派遣をする前に、現地で発表する研究プレゼンテーションの原稿チェックやプレゼン・コーチもしていただいている。中 3 のテーマ学習や高 2 の課題研究の Science Dialogue（講座の前半では科学系研究者のプレゼンを伺い質疑応答、後半では自分のテーマを決めて英語でプレゼン活動）。その際のコーチや、最後のプレゼンテーション大会のコメンテーターもしていただいている。それぞれがプレゼン経験も豊富で、しかも英語を第 2 外国語としている方が多いので、学習者の英語学習の苦労も心得ており、英語のティーム・ティーチングでネイティブの方から教わるのとは違った利点もある。

しかし、コロナ禍により新しい講師の確保が難しく、現在は以前のような形での実施が難しい。しかし最近では、ディベートで活躍する卒業生に講師を務めてもらい語学部のディベートチームへのトレーニングに注力して頂く他、課題研究などの講師も務めて頂くなど、実施可能な形を模索しながら進めている。

2．生徒への影響

生徒には様々な形で刺激となっているが、特に最近は、語学部のディベートチームへのトレーニングに多大なる貢献をして頂いており、大会等での上位入賞の原動力となっている。また、例年は中 3 テーマ学習・高 2 課題研究の「サイエンス・ダイアログ」での生徒の発表指導や、台中一中や釜山国際高校との交流での発表原稿・プレゼン指導にもご尽力頂いている。今年度は、海外留学の application form の書き方や適切な英文エッセイの指導もしていただいている。例えば、“Instead of “hardworkingness” it should say “work ethic”. Instead of “high communication skills” it should say “high level communication skills”” のような語彙レベルのアドバイスから、“For the other essays. I think you should reformat to a standard 3-5 paragraph essay form,” のような全体の構成に至るものまで適切なアドバイスをいただくことは、生徒にとって自信にもつながっているようである。

今年度の English Room の様子

（文責：研究部・国際交流担当　八宮孝夫）

生徒が自主性を持って活動できるイングリッシュルームを目指して

① 活動報告

COVID-19 の流行によりこの 2 年間、イングリッシュルームの活動は本校 ALT とのオンラインでの英会話や、放課後の少人数でのゲームや会話が中心になっていた。だが、渡航制限の緩和を受けて今年度は新しい取り組みを始めることができた。具体的には、近隣の東京国際大学の協力を得て、日本に短期留学中の学生をゲストスピーカーに派遣してもらうことができた。留学生たちには本校の生徒たちと一緒に活動したい内容を事前に送ってもらい、自由にプランを作ってもらった。結果、フラッグフットボールの試合や、日系ブラジル人のコミュニティについて、また故郷でのクリスマスの祝い方など、ゲストの個性が活かされた様々な企画が開催された。本校生徒たちにとっても、英語学習の動機付けだけでなく、地域社会に住む外国人のために自分たちができることを考える良い、きっかけになったようだった。

② 児童生徒の感想

学校では、海外で暮らしたことのある人との文化共有、交流など知る機会が少なく、イングリッシュサロンでは様々な文化を知ることができるので面白いです。ネイティブスピーカーの人とじっくり話すことができ、英語の勉強にもなりました。

毎週コンプター先生とお話ししたり、ゲームで遊んだりすることを楽しみにしていました！ネイティブの方と英会話できる機会はないので、イングリッシュルームの時間を使って、自分の英語力を鍛えて、英語に自信を持って使える場所だと思います。

（文責：バゴット優子）

附属視覚特別支援学校のイングリッシュルーム活動

【小学部】

小学部では今年度も、５・６年生外国語の ALT として Ruth 先生に月１回来校していただき、ネイティブの英語に触れる機会を設けました。Ruth 先生は元音楽教師で、授業での英語の歌唱指導が本格的で楽しく、多くの英語の曲を練習することができました。聞き取りやすい発音で文法の難易度にも十分配慮してくださるので、児童にはわかりやすいと好評でした。

授業の様子をご紹介します。Ruth 先生は教科書に出てくるお正月の物語を、登場人物ごとに声色を変えて、生き生きと読み聞かせてくださいました。それから、子どもの頃のクリスマスの思い出、年末のカウントダウンの様子をわかりやすく話してくださいました。教科書の文例を用いた児童の英語の発言をほめて励まし、その発言に関連した質問をして下さると、生徒は自信をもってはっきりと英語で答えていました。また、ある時には、アメリカの小学校の昼食の様子を話してくださいました。児童は日本の学校との違いを考えながら、興味深く聞いていました。色々な国の特徴を英語で説明し国名を当てるクイズでは、児童は国名を英語の発音で答えていました。

３・４年生の外国語活動では、昨年度に引き続き Nancy 先生にご協力をいただき、月１回イングリッシュワークショップを設けました。簡単な自己紹介やあいさつの仕方、季節にちなんだ単語やフレーズのレッスン、親しみやすい英語の歌やダンス、様々な素材を用いたクラフトなど、毎回盛りだくさんな活動を行いました。子どもたちは何回も繰り返す中で、あいさつの言い回しを覚え、友だちに尋ねたり答えたりするやりとりの楽しさを体験しました。Nancy 先生は、子どもたちが実際に触って確かめられるよう、いつもフィギュアや実物を用意してくださいました。また、クラフトタイムは毎回子どもたちに大人気で、作る楽しさ、自分が作ったもので遊ぶ楽しさを存分に味わいました。

１・２年生は、今年初めての試みとして「子ども会イングリッシュワークショップ」を行いました。これは、３年生から始まる外国語活動への橋渡しとして、英語の表現や歌などに親しみ、楽しむ体験を持つことをねらいとしたものです。“My name is….” と自己紹介をしたり、CD に合わせて “Head, shoulders, knees and Toes” や、“Baby Shark” の歌を歌ったり踊ったりして楽しみました。

３・４年生イングリッシュワークショップ
子どもたちが大好きなクラフトタイムの様子です。

１・２年生イングリッシュワークショップ
音楽に合わせてからだを動かしています。

（文責：青木京子、浅野慎子）

【中学部・高等部】

① 活動報告

中学部では、大きな行事を１つ終えた９月から開始し、１年生が１回、２年生が３回、３年生が２回オンラインで実施した。（令和５年１月末現在）放課後に設定することが難しかったことから授業内での実施となったが、それにより全員が確実に参加し、１人３～４分ずつ、ニュージーランド出身のネイティブスピーカーの方と英語でのコミュニケーションを楽しむことができた。以下の感想にあるように、生徒たちは、話題を予告しておくと事前に準備をしたり、教科書で学んだニュージーランドについての知識をもとに質問をしたり、英語で感想を書いたりなど、積極的に取り組んだ。

高等部では、今年度も６月から３月まで、計 27 回のイングリッシュルーム活動を実施した。講師は、昨年度と同様、ニュージーランド出身のネイティブスピーカーに依頼した。開催方法は、新型コロナウィルスの感染拡大防止の観点から、引き続きオンラインで実施した。また、クラスを２分し、火曜日を高１と高２、金曜日は高３のみを対象とし、可能な限り週に２回実施した。また、生徒同士の密を避けるため、グループ活動は行わず、年度を通して１対１で行った。１人６分間の時間の中で、講師の先生が話題を用意してくださり、生徒も苦労しながらもコミュニケーションを楽しんでいた。

② 生徒の感想

〈中学部〉

・事前に話すことを準備しておいたおかげで、以前よりもお話しすることができた。英語は苦手でもアベッシュ先生とお話しすることは楽しかった。次はもう少し聞き取りやすいようにゆっくり話せるようにしたい。
・アベッシュ先生に質問して、（教科書に書かれていたように）ニュージーランドの学校にはティータイムはあるが、（その時間には）あまり食べないということが分かった。
・I had a good time. Avesh-sensei was very kind. I want to talk with him again. Thanks for the English room.
・僕のトピックは飛行機だったが、少し趣味にも結び付けられて良かった。先生と気が合ったことも、うまいこと話せたのも良かったと思う。また年明けにでもやりたいと思った。いつもイングリッシュルームはすごく楽しい。

〈高等部〉

・６分間のイングリッシュルームは、毎回自分が英語と向き合う材料になっていました。最初はすべて英語で会話することへの不安もありましたが、好きな英語を使って話せるうれしさもありました。実際、やはり会話中に言葉が出てこなくなってしまったり、内容が理解できなかったりして、じれったさを感じることもありました。そういうときには、先生が分かりやすい単語を使って丁寧に説明してくださり、回数を重ねるごとに、聞き取れるようになったり、自分が言いたい内容を言えることが増え、自信にもつながりました。どんどん楽しくなっていって、毎回６分間がとてもあっという間でした。イングリッシュルームを終えた後には、新たな会話への意欲や、単語・表現に関して疑問が生まれ、自分で調べたりもしました。そして、冒頭に書いたとおり、「英語と向き合う材料」になっていました。来年度も是非取り組みたいです。そして、スピーキング力をさらに伸ばしたいです。
・私は English room を通して、英語で「会話」することへのハードルが下がったと感じている。読む・書く・聞くというのは、一人の学習でも鍛えることができるが、話すについては一人での学習は難しい。それを English room という、ネイティブの方と話す機会があったことで、話す技能を鍛えるとともに、英会話への抵抗がなくなったことを実感している。この会話の経験を留学にも活かしたいと思う。
・今年も１年間イングリッシュルームに参加して、とても充実した良い経験になったし、自分自身も成長できた。少し前までは、言葉が分からずに詰まってしまった時、アベッシュ先生にヒントをも

らってなんとか会話が続けられたということが多かったが、最近は、知っている単語を組み合わせて、なんとか自分の思っていることが表現できるようになった。また、話しながら時間を気にすることもなくなり、自然に楽しみながら会話ができるようになったと思う。今後もイングリッシュルームを通して身についた対話力や表現力をよりレベルアップさせて、自分の生活の中で英語を生かしていきたい。

（文責：宇野和博・堀口晃代）

「わかった、伝わった、楽しい」イングリッシュルームを目指して

１．活動報告

本校の子供たちは、音声に加え非言語情報（話し手の表情や口の動き）、視覚情報（文字、絵等）など様々な情報から話の内容を理解しコミュニケーションを取っている。イングリッシュルームにおいても音声認識ソフトや文字情報を提示して英語のコミュニケーションを楽しむことができるように工夫している。

①　小学部（低学年１回、中学年２回、高学年３回実施）

１、２年生は、それぞれ時期に合わせて「ハロウィン」「クリスマス」についてのやり取りを楽しんだ。子どもたちは日本とアメリカ合衆国との違いに驚くとともに、「いつかアメリカに行って、先生が言っていたものを見てみたい」という感想が多く聞かれた。３、４年生は、単語だけでなく“I'm ～”、“I like ～”など自分のことを講師に伝える活動を多く行った。自分の話した英語が講師に伝わったときのうれしそうな顔が印象的だった。５、６年生は、自分のことや学校行事についての紹介をもとに、講師からの質問に答えるなど、双方向のやり取りを楽しんだ。５、６年生は何年も続いている活動ということもあり、自分から積極的に英語を用いたコミュニケーションを取ろうとしていた。その中で、日本語と英語の発音やイントネーションの違いや、日本語と英語での表現の微妙な違いに感心する様子も見られた。

子どもたちにとって、これまで特に大きな疑問も持たず当たり前だと思っていたことが、実は日本独自のことであることを知るなど、英語という「言語」に触れながら、単なる言葉のやり取りではなく、講師の出身地であるアメリカ合衆国の「文化」を体感する貴重な場となった。

②　中学部

中学部では以前からお世話になっている外国人講師をお迎えし、昼休みにイングリッシュルームを開設している。中学生は使用できる語彙や文法が学年によって異なるため、１、２年生は学級ごと、３年生は学年で日を指定して行っている。そうすることで、引っ込み思案な生徒も講師とのコミュニケーションを確実に体験する機会がもてている。校舎内で講師とすれ違うと親しげに挨拶や簡単な会話を交わしている生徒も多く、英語でのコミュニケーションに慣れてきている様子がうかがえる。

講師には生徒が学習している教科書の内容や文法を考慮し、質問やスピーチを考えていただいている。生徒はお互いに「教科書に出ている表現だ」「前回、勉強した単語だ」「○○という意味だよ」などを話しながら、講師に質問をしたり、講師からの質問に答えたりしている。また、今年度からiPad 上で授業支援アプリ MetaMojiClassRoom を活用し、講師に話した内容を書き込んでいただき、ディスプレイに提示し、文字で確認できるようにした。支援アプリを活用することにより、同じファイル上で補足説明などを事後に書き込むことも可能で、家庭での振り返りや通常の英語の授業での復習等への活用も容易にできるようになっている。

③　高等部普通科

高等部普通科では、昼休みの時間を使って５回実施した。参加した生徒の興味あることについて質疑応答を英語で行う形式で進めた。生徒は積極的に講師に質問し、楽しく会話を進めることができ

た。昨年度、イングリッシュルームで使用していた三菱のしゃべり描きアプリやロイロノート・スクールのカードだけでは、講師の発する独り言が分からず、生徒から「もっとイアン先生が話していることを知りたい。」と意見があった。できるだけ講師が発した言葉をそのまま文字化する手段として、本年度は Google ドキュメントを使用して文字情報をテレビ上に投影した。また、質問や話題はロイロノート・スクールのカードを使用し、スクリーンに投影し、２画面で会話を進めた。講師の一言一言を文字化することで新たな気づきがあり、英語のネイティブ話者が自然に話す表現を学ぶことができた。音声が適切に文字化されない時は、キーボードを使用し、ドキュメントに表示されている英語を訂正することができるので、生徒が文字情報に混乱することはなかった。参加した生徒は「面白かった。」「普段の授業より、いっぱい話せた。」と感想を言っていた。参加者の人数が少なく一人一人が自由に趣味や興味について話せる時間なので、授業中に発言が少ない生徒もたくさん英語で話すことができたようだ。

④　高等部専攻科（ビジネス情報科、歯科技工科各５回実施）

普段の英語の授業ではなかなか知る機会のない他国の文化や、日本と海外の習慣の違いについて学ぶとともに、英語での会話を通して、国際文化や生の英語に触れる大変良い機会となった。実施に際しては、講師と事前の打ち合わせを行い、生徒が楽しめるような内容とした。

歯科技工科の生徒は、英語での自己紹介や講師の出身国や文化についてのやりとりを通して、言語や文化について体験的に理解を深めることができた。講師の発話は、音声認識システムを用いてモニターに字幕を表示する情報保障を行うことで、字幕を活用して分からない英語の意味をその都度調べるようにした。この方法を用いることで、スムーズに会話のキャッチボールができるとともに、新しい英単語も学習できた。最初は緊張していたが、お互いの自己紹介や腕相撲をするうちにすぐに打ち解け、楽しみながらイングリッシュルーム活動の時間を過ごすことができた。

造形芸術科とビジネス情報科の生徒たちも同様に、意欲的に取り組んでいた。スライドを作って発表し、講師が質問をした。他の生徒も発表の内容を見ることができ質問が発されることもあった。講師の話はとても興味深く、生徒は時間いっぱい話を聞こうとしていた。生徒からは「言語だけでなく、文化、価値観、先生自身の話を聞くことができた」「英語で話すのは苦手だったが、身ぶりで伝わって楽しい」という感想があった。イングリッシュルーム活動を通じて、英語でのコミュニケーション意欲の向上につながった。

英語を学ぶ・発信するモチベーションを段階的に育むイングリッシュルーム

① 活動報告

新型コロナウイルス感染拡大防止策が一部緩和され、昨年度より対面実施の機会を確保することができた。１～３学期の定期的なイングリッシュルーム開室に加え、夏季休業期間中のイングリッシュルームも対面実施を２年ぶりに再開した。オンライン参加に対する需要も残っていたため、各学部においてオンラインと併用したハイブリッド形式で実施した。定期的な対面実施が可能になり、英語に触れる機会が増えた一方で、年度当初２名の外国人講師（以下、ALT）で実施していたイングリッシュルームだが、一時期 ALT の不在期間があったため中高等部のイングリッシュルームの機会の確保が厳しい時期もあった。

定期的なイングリッシュルームでは、小学部は低学年、中学年、高学年と学年別に回数を確保し、中学部と高等部は曜日を分けて実施した。夏季休業期間中のイングリッシュルームでは、対面と併用し Web 会議システム Zoom を用いて各回 30 分で行った。小学部は定期開室時と同様に学年別に時間を区切り、ハイブリッド形式（写真１）以外に対面のみの時間も設けた。これは、オンラインでは難しい直接体験を通して英語に触れる機会の確保を目的としたためである。開催回数としては小学部７回×５日間、中・高等部３～４回×４日間で設定した。

実施内容としては、小学部は英語に慣れ親しむことができるよう、英語を使って楽しむ視点を大事にし、中・高等部では既習の知識をコミュニケーションの場で活用する視点と異文化に触れるという視点から内容が構成された。具体的に、小学部では単語が書かれたカードを使ってカルタ取り（写真２）をしたり、“big”“small”、のように対義語となるカードを集めていく神経衰弱をしたり、かくれんぼを通して“○○、where are you?”“I'm here!”のように体験を通してフレーズを理解する（写真３）などゲーム要素を含みながら楽しく英語に触れていた。高学年になるにつれて、カード等は用いるものの“How are you?”“I'm happy.”のように実際の会話の中で当てはめて活用していた。中・高等部では、洋画鑑賞をして海外の雰囲気に触れたり（写真４）、ALT の地元の食文化やトピックに沿ったやりとりをしたりした。（写真５、写真６）

（写真１画像加工あり）

（写真２）

（写真３）

（写真４ 画像加工あり）

（写真５）

（写真６）

学期中に開室している定期的なイングリッシュルームでも同様に、英語に慣れ親しむところから始まり、学年が上がるにつれて実際の場面を想定した会話や日常場面のやりとりへと段階を踏んで構成

されている。実施日は木曜日に小学部低学年、中学年及び中学部を対象に２コマ、金曜日に高等部を対象とした１コマで実施している。今年度は継続的な対面実施が可能であったため、小学部ではハロウィンやクリスマスなどのイベントを約２年ぶりに再開することができた。（写真７・写真８）感染症対策で小規模実施ではあったが、児童にとっては海外のイベントを体験するいい機会となったようである。

（写真７）

（写真８）

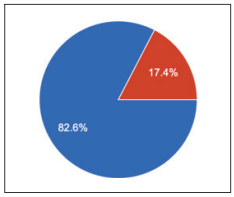
② 児童生徒のアンケート回答より（回収数：小 23/37、中 21/29、高 17/25）

今年度のイングリッシュルームの取り組みについて、児童生徒へアンケートを行った。その中からいくつか抜粋する。

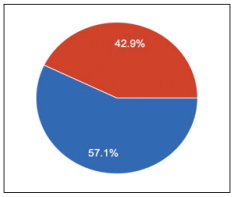
【グラフ項目】

（５：とてもそう思う４：そう思う３：どちらとも言えない２：あまりそう思わない１：全く思わない）

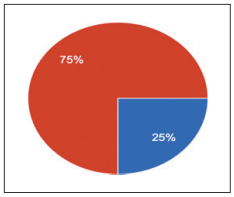
１ 今年度のイングリッシュルームの参加の可否について（青：参加した、赤：参加しなかった）



小学部

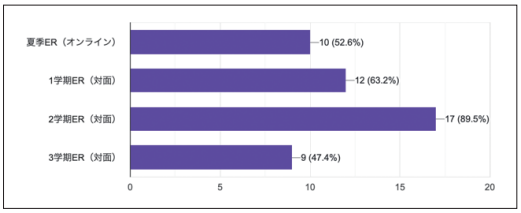


中学部

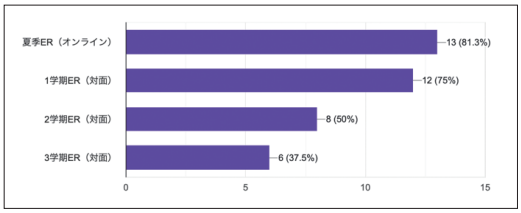


高等部

２ イングリッシュルームの参加方法について（複数回答可）

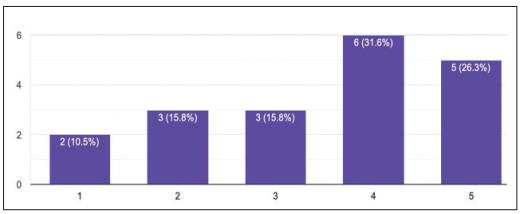


小学部

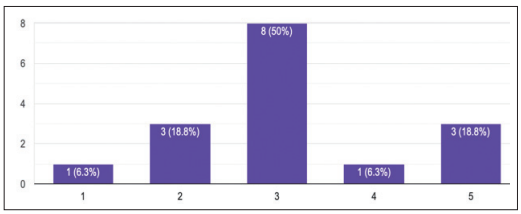


中・高等部

３ イングリッシュルームに参加してきて自分は変わった



小学部



中・高等部

【自由記述】
1　イングリッシュルーム内で行ったこととの中で楽しかったこと
《小学部》
・英語のクイズ
・ハロウィンパーティやクリスマスパーティなどのイベント
《中・高等部》
・英単語予想や知らなかった英語を学んだりクイズをしたりしたこと
・自己紹介ゲーム

2　イングリッシュルーム内で行ったことの中で難しかったこと
《小学部》
・言っていることがわからない時がある
・初めて聞く英語がたくさんあって難しかった
《中・高等部》
・英語に慣れるまで
・何気ない会話や些細なコミュニケーション

3　イングリッシュルームに参加しての自身の変容
《小学部》
・英語が好きになった
・英語を使うとみんなにすごいと言われて嬉しい
・英語を使うことに抵抗がなくなってきた（恥ずかしくなくなった）
・興味を持つようになった
《中・高等部》
・英語の理解がさらに深まった
・学んだことを積極的に使うようになった
・卒業したら、アメリカに住みたいと思えた
・英語の表現のバリエーションが増えた

4　イングリッシュルームに参加しなかった理由
《小学部》
・帰宅時間が遅くなる
・曜日が合わない
・英語に苦手意識がある
《中・高等部》
・曜日と時間が合わない
・部活動や進路活動と重なり、放課後に時間が取れなかった
・英語が苦手だからあまり参加したくないという気持ちがある

5　自由記述（今後の要望）
《小学部》
・物理的に（教室に車椅子で入れるか等）習い事への敷居が上がるので、学校内で活動していただけ てありがたい。引き続き活動が行われてほしい。（保護者）
・もっとたくさん英語の歌を習いたい
・英語の授業が始まったら参加したい（低学年児童）
・もう少し簡単だと嬉しい

《中・高等部》
・理解度別のクラス分けをしてほしい
・初級のクラスがあれば、参加して英語をもっと勉強したい
・１週間のアメリカ留学に行くのですが、アメリカに行って英語が上達した上でまたイングリッシュルームに参加したい

コロナ禍でなかなか継続的に課外活動であるイングリッシュルームを実施できず、対面でのやり取りが難しい時期が続いた中で、今年度は定期的な開催が再開された。夏季休業中のイングリッシュルームも対面実施を再開し、制限はありながらも徐々にではあるがコロナ禍前に行っていた交流がハイブリッドや少人数実施のように少し形を変えて実現可能となりつつある。結果として、イングリッシュルームに参加することで、外国語・英語の入門期にある小学部の児童にとっては、ゲームや歌を通じて英語に慣れ親しみ始め、「好きになった」「興味を持つようになった」「英語を使うことが恥ずかしくなくなった」という英語に触れ続けるモチベーションに繋がっているようである。中・高等部の生徒にとっては、「文化に触れられる」「既存の知識を使ってコミュニケーションをとることができる」「将来アメリカに住みたいと思えた」とあるように、英語の楽しみ方にも深みが増し、興味関心の幅を広げる機会となっているようだ。

一方で課題として、小・中・高に共通して、「習熟度別やもう少し簡単なクラスがあるといい」という声があり、「英語が苦手だから」「英語に苦手意識があるから」とイングリッシュルームに参加しなかった理由とも繋がる。習熟度別実施については、コロナ禍前に児童生徒の英語の理解度を鑑み、学部を跨いだ参加方法を行っていたことがあり、今後改めて検討したい。

また、「曜日や日時が合わない」という回答が複数見られる。このことは、当校に在籍する児童生徒の中には遠距離の通学やリハビリテーションを含んだ定期通院など、放課後の活動時間のとりにくさという背景も影響していると考えられる。その一方で、放課後は時間が合わないが夏季休業中は参加したい、という声もあるため、開催形態の工夫により、より多くの児童生徒のイングリッシュルームの活用が期待できる。一昨年から実施しているオンライン開催による経験も活かしつつ、イングリッシュルームが英語に触れる機会、楽しむ機会、じっくりコミュニケーションをとる機会として機能し、英語を広く活用できる場となるよう整えていきたい。

6. おわりに

ウィズコロナで深めた本学附属学校の国際教育を振り返って

附属学校国際教育推進委員会 委員長　梶　山　正　明

2022年度も引き続きCOVID-19感染は増減を繰り返したが、ウィズコロナ3年目を迎えた各附属学校では、これまでの経験を生かしながら感染防止対策に目を配り、ほとんどの対面授業や学校行事などの教育活動を復活させていった。また、政府・大学による渡航規制の緩和等も行われ、一部の附属学校では、生徒の海外研修や教員の海外派遣や受入れ研修が再開された。一方、感染拡大の「波」の予測が難しかったこともあり、多くの附属学校においては、引き続き工夫を凝らしながらオンラインを主体とする交流が進められた。

本報告書に記載されている交流先の国名を列挙すると、アジア（アゼルバイジャン、インド、インドネシア、韓国、キルギス、シンガポール、タイ、台湾、中国、フィリピン、ミャンマー）、ヨーロッパ（イギリス、ウクライナ、デンマーク、ドイツ、フランス、ポルトガル、）、南北アメリカ（アメリカ、カナダ、グアテマラ、コスタリカ、コロンビア、ブラジル、ボリビア）、オセアニア（オーストラリア）と25カ国におよぶ。

交流の形態も学校によりさまざまであるが、附属小学校の教員派遣によるデンマーク・イギリスの小学校での授業や附属坂戸高校の生徒によるオーストラリア研修などが対面で実施された。また、3校の生徒が短期留学や国際科学フェアで海外渡航を果たしている。そのほか、坂戸高校や視覚特別支援学校、久里浜特別支援学校では、海外からの研修生や教育実習生の受け入れも行われている。
一方、日本に滞在する社会人や留学生を活用した、対面での交流プログラムやイングリッシュルーム活動も引き続き盛んに実施された。桐が丘特別支援学校や大塚特別支援学校では音楽を通じた交流や給食による各国料理の体験など、児童・生徒の参加意欲を高める工夫がなされている。オンラインによる学校間交流も引き続き実施され、聴覚特別支援学校の美術作品交流など、こちらも各校で工夫が凝らされていた。

以上の各附属学校における国際教育の状況を踏まえ、対面での交流が難しい中で、さまざまな工夫を凝らしてきた各校の実践について、今後はその発表の場を設けるなどして情報共有の場を充実させていきたい。また、こうした実践例について、より一層のブラッシュアップを図るとともに、国立大学法人の附属学校として新たな国際交流のモデルとなるような取組みについては、対外的な情報発信を進めていきたいと考えている。

また、WWL事業においては、附属坂戸高校を中心に構築したALネットワーク、筑波大学の授業等のリソース、各校のオンライン交流のノウハウ等を活用し、次世代の人材育成を目指した国際教育を引き続き進めていきたい。その一環として、今年度採択された「個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業」を推進し、オンライン先取り履修コンテンツの作成に取組むとともに、附属学校でのニーズ調査や校内での位置づけの調整など、受講のための準備を進めていく。

国立大学法人の附属学校は、エネルギー・環境問題をはじめとする、地球規模の課題に立ち向かう次世代のグローバル人材の育成に向けて、新たな教育課程や実践プログラムを開発するミッションを帯びている。そこでは、環境や文化の異なる海外の人々と協働して国際的な課題の解決に取り組み、その過程においてリーダーシップおよびフォロワーシップを発揮できる人材の育成が求められている。個々の附属学校が全国のセンター的な存在として先導的な教育活動を実践するとともに、筑波大学の国際展開力を活用した高大連携による国際教育活動をさらに推進し、地球規模課題にも地域的課題にも貢献できる人材の育成を目指していきたい。

（資料）附属学校の国際交流協定締結状況

項目 / 学校名	締結相手（国名、機関名）	協定締結日	現締結期間	交流の分野	締結の目的	締結の経緯
附属小学校						
附属中学校	中華人民共和国 北京師範大学第二附属高校	2006.12.1	2011.4.28 ～ 2016.4.27	中等教育全般	中学校のレベルで、生徒の相互交流の意義とその可能性を考慮したため	北京師範大学と筑波大学との交流を目的として結ばれた協定のなかで、北京師範大学第二附属高校と筑波大学附属中・高等学校及び附属駒場中・高等学校も付随して結ばれたもの。
附属高等学校	中華人民共和国 北京師範大学第二附属高校	2006.12.1	2011.4.28 ～ 2016.4.27	教育に関する分野	相互の学校交流と生徒間交流	筑波大学が北京師範大学と交流協定を結んだ際、附属高等学校も交流組織の一つとして参加した。
附属駒場中・高等学校	中華人民共和国 北京師範大学第二附属高校	2006.12.1	2011.4.28 ～ 2016.4.27	北京師範大学附属実験中学との中等教育分野での交流	生徒の国際交流の促進	筑波大学と中華人民共和国北京師範大学との交流協定締結に協力した。
	中華民国（台湾） 国立台中第一高級中学	2015.12.11	2015.12.11 ～ 2020.12.10 2020.12.11 ～ 2025.12.10 （締結更新）	研究発表（主に理系分野）、文化交流など	両校は、学術交流と学校間の提携を促進し、生徒達の国際的な視野の拡大を促進することを目的とする。	本年４月、相手校から姉妹校協定締結の申し出あり、５月１日に本校校長他が訪問した際に詳細な打合せを行った。５月27日、相手校校長が来校し、詳細事項を詰めた。 2020年12月、台中一中とのオンライン研究交流の際に、オンライン上で本校と相手校長が締結更新の調印を行った。
附属坂戸高等学校	インドネシア共和国 ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校	2010.12.1	2023.2.10 ～2028.2.9 （2回名の更新）	国際教育・ESD（教員間の教育研究、生徒の協力的教育活動）	生徒・教員の相互交流および生徒同士の協働的教育活動の実施	交流は筑波大学農林技術センターが2008年に採択を受けた文部科学省「国際協力イニシアティブ」教育協力拠点形成事業に端を発する。その後トヨタ財団「アジア隣人プログラム」の助成を受けた活動や「アジア高校生聞き書きプログラム」などで協働。
	インドネシア共和国 林業省附属林業教育センター	2013.3.19	2022年度現在更新手続き中	国際教育・ESD（教員間の教育研究、生徒の協力的教育活動）	生徒・教員の相互交流および生徒同士の協働的教育活動の実施	以前からの「アジア隣人プログラム」や「アジア高校生聞き書きプログラム」等でのインドネシアでの活動の際に協力を得たことから交流が始まった。林業教育センター・インドネシア林業省・在日インドネシア大使館の強い要望を受け協定締結に至った。
	インドネシア共和国 国立パダン第６高等学校	2015.9.1	終了	国際協働学習、ESD，ユネスコスクール間の国際ネットワーク構築	生徒及び教師の異文化理解及び国際的研究活動のため	2012年５月のインドネシアユネスコ国内委員会との交流を契機として、毎年本校と同委員会との交流を深めていった。2014年ユネスコスクール関係者他が来校し、パダン校から強い関心を示され、2015年本校教諭が訪問し準備を本格的に進めることで合意した。
	フィリピン大学附属ルーラル高等学校	2015.9.1	2016.11.1 ～ 2021.10.31	国際教育・ESD（教員間の教育研究、生徒の協力的教育活動）	生徒・教員の相互交流および生徒同士の協働的教育活動の実施	2010年に農林技術センターが開催した「国際農学ESDシンポジウム」において附属高校フォーラムが開催された際に、国際教育担当教員間で連携に向けた協議を開始。その後、卒業研究に関する相互受入・支援、高校生国際ESDシンポジウムにおける協働活動を重ね、2016年に交流協定に関する合意にいたり締結した。
	タイ カセサート大学附属高等学校	2017.11.9	2023.2.10 ～2028.2.9	国際教育・ESD（教員間の教育研究、生徒の協力的教育活動）	生徒・教員の相互交流および生徒同士の協働的教育活動の実施	2010年に農林技術センターが開催した「国際農学ESDシンポジウム」において附属高校フォーラムが開催された際に、国際教育担当教員間で連携に向けた協議を開始。その後、卒業研究に関する相互受入・支援、高校生国際ESDシンポジウムにおける協働活動を重ね、2017年に交流協定に関する合意にいたり締結した。
附属視覚特別支援学校	タイ視覚障害者支援クリスチャン財団及び財団管理下の盲学校、視覚障害関連教育・福祉施設（タイ）	2020.1.13	2020.1.1 ～ 2024.12.31	短期留学を含めた生徒間の学習活動の交流 視覚障害教育及び関連分野に関する情報交換	両組織の生徒の交流活動を通して、生徒の国際感覚及び学力の向上を推進する 両国の文化について深く学び合うとともに、視覚障害教育関連の活動を推進し、両国ならびに両組織の発展に寄与する	2015年から2017年にかけて、教育長裁量経費によりタイプログラムを実施。高等部生徒が毎年タイに渡航し、タイの視覚障害生徒との交流が行われた。 2018年度からは、文部科学省トビタテ！留学JAPANの制度を活用し、高等部生徒の短期留学が始まる。今後短期留学を定期的に実施する計画があることから、2019年に協定について打診し、2020年１月に締結に至った。
附属聴覚特別支援学校	フランス共和国 国立パリ聾学校	2003.9.22	2021.9.30 ～ 2026.9.29	初等中等教育（特別支援教育）における生徒間交流	フランスと日本両国の友好と親善を促進するとともに、両国の聴覚障害教育の発展に寄与する	1999年頃、本校高等部専攻科生徒とパリ聾学校高等部職業科生徒の間で文通を開始した。 2002年、パリ聾学校長から姉妹提携の申し出があり、2003年９月、パリ聾学校にて、交流協定書を交わした。

（2019年4月～2023年3月）

締結のメリット	協定締結後の構想			その他参考になること
	教員の交流方法	児童・生徒等の交流	その他	
現在、本校は実交流をしていないので、現状ではなし。		現在は特になし	現在は特になし	現在、中学校（中等教育）レベルでの実交流はされていないが、今後将来に向け本協定が両者間（中等教育）にとって有益となる事例を検討していきたい。
相互の文化交流と人的ネットワーク作り及び情報交換	意見交換・情報交換	相互の一日体験入学及び文化交流		2009年10年に相互交流を実施
この協定をきっかけに、2007年、2008年にSSH（スーパーサイエンスハイスクール）事業で訪問することができた。	SSH事業として北京を訪問	SSH事業として北京を訪問		
国立台中第一高級中学は理数系に優れ、大学からの指導・サポートを受けていることなど、本学が取り組む高大連携にとって非常に参考になる。				
・本校の生徒に交換留学生としてインドネシアに渡航できる機会を与えられる。 ・本校の教員に国際的な教育研究活動を行う場を提供できる。 ・インドネシアから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できる。④高校生、学類生、大学院生の国際協働学習の機会を与えられる。	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	・交換留学（現地校で他の生徒とともに授業等に参加、期間は1ヶ月程度～1年の間で状況に応じて実施） ・プロジェクト活動（SGH事業における日本およびインドネシアでの合同フィールドワーク、環境問題等についてのネット会議、など）		
異文化理解の促進および協働学習活動を通じての国際教育の実現。センターに附属する5つの学校がインドネシア各地にあり、本校としても活動フィールドを飛躍的に広げられる。付加的要素として将来的にインドネシアから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できるかもしれない。	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	協働的研究活動の実施、その他一般的交流活動（交換留学含む）		現在、協定延長に関する協議を継続中
・附属坂戸高等学校のスーパーグローバルハイスクール事業に関する支援 ・スーパーグローバル大学事業，大学の世界展開力事業に対する支援 ・ESDおよびその後継事業であるGAP活動に関する国際協力 ・生物多様性保全に関する学術交流の促進支援	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	協働的研究活動の実施、その他一般的交流活動（交換留学含む）		インドネシアユネスコ国内委員会との連携
・本校の生徒に交換留学生とフィリピンに渡航できる機会を与えられる。 ・本校の教員に国際的な教育研究活動を行う場を提供できる。 ・フィリピンから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できる。④高校生、学類生、大学院生の国際協働学習の機会を与えられる。	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	協働的研究活動の実施、その他一般的交流活動（交換留学含む）		
・本校の生徒に交換留学生としてタイに渡航できる機会を与えられる。 ・本校の教員に国際的な教育研究活動を行う場を提供できる。 ・タイから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できる。④高校生、学類生、大学院生の国際協働学習の機会を与えられる。	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	協働的研究活動の実施、その他一般的交流活動（交換留学含む）		
生徒の国際的素養や国際感覚を身につけ、将来世界で活躍する視覚障害者を育成することができる。 国際教育拠点の視覚特別支援学校として、日本の視覚障害教育をタイに発信及び展開させていく。またタイのインクルーシブ教育にも貢献できる。	学校訪問、視覚障害教育に関する情報交換等	短期留学プログラムの実施 Zoomを含むweb会議システムを活用した交流活動		
日本の聴覚特別支援学校（聾学校）を代表する本校が、世界最初の聾学校である国立パリ聾学校と交流関係を持つことは、グローバル化を目指す筑波大学に寄与できる。	教科指導や聴覚障害教育におけるグローバル人材育成についての情報交換および意見交換。	交流会や授業交流（英語・体育等）の実施		

項目 / 学校名	締結相手（国名、機関名）	協定締結日	現締結期間	交流の分野	締結の目的	締結の経緯
附属聴覚特別支援学校	大韓民国 国立ソウル聾学校	2015.6.1	2018.6.1～2023.5.31	生徒間の学習活動の交流、聴覚障害教育および関連分野に関する情報交換	両校は、特別支援教育とりわけ聴覚障害教育に関わる教員交流・生徒交流・情報交換を通して、両国の文化について深く学び合うと共ともに聴覚障害教育関連の活動を推進し、両国並びに両校の発展に寄与する。	2008年、筑波大学教員と本校校長他が美術教育における ICT 教材の共同研究をすすめるために訪問、その後、本校中学部生徒との E-mail での交流活動を行うなど交流協定の基盤を築き締結に至った。
附属大塚特別支援学校	大韓民国 大邱大学校大邱保明学校	2009.12.29	2009.12.29～2014.12.28	知的障害教育の実践・研究（指導法・教育課程・教材教具等）	教員の交流、生徒の交流、共同研究・研究交流の推進、研究成果・研究資料の交換等	筑波大学の障害科学系と大邱大学障害児教育が既に交流協定を締結しており、本学と同様の特別支援学校を有することから、学校間交流にまで協定を広げ、現場での教育実践・研究の国際教育協力を推進する必要があった。
	インドネシア共和国 チパガンティ特別支援学校	2018.2.	2018.2.～2020.2	知的障害特別支援学校における授業研究会をとおした情報交換・交流	・授業研究会による交流において教師の授業力の向上を図る	2017年11月に、本校の教諭2名がチパガンディ特別支援学校を訪問した。授業研究会に参加し、インドネシア教育大学にて日本の知的障害特別支援学校の教育について講演をした。講演には、インドネシア国内から特別支援教育に携わる500人以上の教員が集まり、日本の特別支援教育への関心の高さが窺えた。授業研究交流を通して互いに意見交換を行うことで、双校の教師の授業力の向上を期待できると考えた。
附属桐が丘特別支援学校	大韓民国 セロム学校 （旧三育再活学校）	2010.2.3	2018.2.13～2023.2.12	・児童生徒間の学習活動の交流 ・肢体不自由教育及び関連分野に関する情報交換	・日韓両国の肢体不自由教育の充実と発展に寄与するため。 ・国際教育の視点の一つである日韓の相互理解と親善を図るため。 ・附属学校の中期目標に挙げている“国際教育拠点事業”の一層の充実を図るため。	2007年・2008年、両校の研究部長が双方で開催された研究会に出席し、それぞれ取組を発表。2008年度末、本校の代表生徒1名を含む訪問団を同校に派遣。2009年、校長ほか2名が同校を訪問し、国際交流協定締結に向けた事前調整を実施。同時にスカイプを使った交流授業を開始。2010年2月、再び同校の校長、研究部長等を本校の研究協議会に招聘し、開催前日に国際交流協定を締結。
	台湾 国立南投特殊教育学校	2016.11.24	2016.11.24～2021.11.23	・児童生徒間の学習活動の交流 ・特別支援教育及び関連分野に関する情報交換	・両校の交流活動（相互訪問等）や教員間の情報交換を実施しやすくするため。 ・児童生徒の異文化体験の機会を確保し、児童生徒の気付きや学びを複眼的・多角的に深めていくため。 ・日台双方の肢体不自由教育及び特別支援教育の発展に寄与するため。	2014年5月、台湾国立南投特殊教育学校の校務顧問が来校し、国際交流協定締結の可否について打診。これを受け、同年11月に本校校長ほか3名が同校を視察し、国際交流協定の締結の可否について検討。2015年10月、同校校長を含む訪問団が来校し、その際に2016年の国際交流協定締結を約束するに至った。
	台湾 国立和美実験学校	2016.11.25	2016.11.25～2021.11.24	・児童生徒間の学習活動の交流 ・特別支援教育及び関連分野に関する情報交換	・両校の交流活動（相互訪問等）や教員間の情報交換を実施しやすくするため。 ・児童生徒の異文化体験の機会を確保し、児童生徒の気付きや学びを複眼的・多角的に深めていくため。 ・日台双方の肢体不自由教育及び特別支援教育の発展に寄与するため。	2014年11月、本校校長ほか3名が、台湾唯一の肢体不自由者を教育する特殊教育学校である同校を視察。2015年11月、本校副校長ほか2名と代表生徒2名で同校を訪問し、国際交流協定締結の可否について打診。その際、2016年の国際交流協定締結について内諾を得た。
附属久里浜特別支援学校	中華人民共和国 浙江省寧波市 達敏学校	再締結へ向けて協議中	2016.8.29～2021.8.28	・教員間の教育実践研究 ・児童生徒間の教育活動	・日中両国の自閉症児教育の充実と発展に寄与するため。 ・日中の相互理解と親善を図る。	・2011年に姉妹校締結を結び、2016年に期間更新を行い、現在に至る。 新型コロナウィルス感染拡大の影響により、交流活動は中断していたが、達敏学校の陳岱校長から、「両国の特別支援教育を発展させるために今後も深く協力したい」旨の連絡があった。加えて、杭州市で開催予定の第19回アジア競技大会に向けて、児童生徒同士の交流も充実させたいという熱い要望があった。さらに、年度途中で赴任した陸雪萍校長からも、姉妹校の再締結やオンラインでの教員間や児童生徒間の交流についての要望を受けた。

締結のメリット	協定締結後の構想			その他参考になること
	教員の交流方法	児童・生徒等の交流	その他	
スーパーグローバル大学である本学の附属学校として、聴覚障害教育の専門性の向上に貢献でき、韓国の特別支援教育に関する最新情報（障害者の権利に関する条約批准の状況、教育課程、教科書等）を得ることができる。	学校訪問、情報交換	ネットワーク回線を利用した遠隔地間授業交流	研究会等での発表	
両国が同じような教育条件・教育環境にあることから、特別支援教育に関してアジアからの情報発信ができる。特別支援学校が５校（視覚障害・聴覚障害・肢体不自由・情緒障害・知的障害）あることの共通性を生かして、他４校の交流に発展できる。	両校とも校費による海外出張で相互に交流する。	メールやHPなどを通じて幼児児童生徒間の交流を進め、将来は高等部修学旅行を韓国として、大邱保明学校への交流訪問を実現させたい。		大邱保明学校には、日本語に比較的堪能な教諭がおり、大邱大学教員（洪先生 本学障害科学系DC修了）が通訳しなくても交流が可能であることが分かった。
・授業研究交流を通して互いに意見交換を行うことで、双校の教師の授業力の向上を期待できる。 ・交流を通して得られた知見の発表し、知的障害教育の実践分野における国際教育拠点として貢献できる。	互いの学校の授業研究会に教諭をそれぞれ派遣し、情報交換、意見交換を行う。 授業研究におけるWeb会議を通して、教員間の相互の専門性の向上を図る。事前に授業研究の動画と指導計画（翻訳済み）を確認してから研究会議に臨む。	Web環境を整え、今後生徒間の交流をインターネット回線やビデオレター等を使って交流を実施させたい。		交流時期と両国を結ぶ通訳者の安定的な供給が必要である。その為の予算確保。
・お互いの学校の研究テーマに沿って意見交換、情報交換ができる。また、研究発表の場を相互に設けることができる。 ・児童生徒の異文化理解を広げ、海外の児童生徒とコミュニケーションする機会を確保することができる。（外国語学習への意欲を高める。） ・筑波大学と桐が丘特別支援学校の存在を韓国でより広く知ってもらえる。	研究テーマ、課題、方法等について意見交換、情報交換、研究会参加、研究成果共同出版。	学校訪問、ビデオレター等の交換、図工・美術等の作品交換、行事等の紹介、スカイプを使った交流授業。		2010年、高等部３年が韓国に修学旅行で渡航し、三育再活学校（現セロム学校）を表敬訪問。当初、高等部生徒による交流活動だけであったが、2012年より小学部児童・中学部生徒も交流活動に加わるようになった。
・韓国セロム学校との国際交流に加え、新たに台湾交流を始めることにより、児童生徒の異文化理解の場を広げることができる。 ・国際教育拠点事業の拡充につながる。	研究テーマ、課題、方法等について意見交換、情報交換。	学校訪問、図工・美術等の作品交換、行事等の紹介、スカイプを使った交流授業。		現時点では、高等部生徒による交流活動のみ。
・韓国セロム学校との国際交流に加え、新たに台湾交流を始めることにより、児童生徒の異文化理解の場を広げることができる。 ・国際教育拠点事業の拡充につながる。	研究テーマ、課題、方法等について意見交換、情報交換。	学校訪問、図工・美術等の作品交換、行事等の紹介。スカイプを使った交流授業。		現時点では、高等部生徒による交流活動のみ。
・達敏学校と本校は、これまで教員が相互に訪問して交流を重ね、日中両国の自閉症教育について情報交換を行ってきた。加えて、達敏学校からの研修生を受け入れ、知的障害を伴う自閉症児に特化した教育課程や効果的な支援方法について講義を実施してきた。今後も、オンラインでの授業研究会等の実施を通して、教育実践の面においての交流を深めることで、達敏学校の自閉症教育に関する専門性を高めることができると考える。また、アジア競技大会に向けて、児童生徒同士の交流も充実させたい。こうした交流は日中友好の観点からも有意義な効果が得られると期待される。	・自閉症児への指導方法、指導内容等にかかわって、研修交流及び研究にかかわる指導助言。	・2023年に開催を控えたアジア競技大会に向けて、応援動画の作成や競技の模擬体験等を行う中で、児童生徒同士の交流を充実する。		・2014年には、二度にわたり本校教員が達敏学校を訪問し、達敏学校幼稚部新設に伴い本校の指導実践と家族支援についての情報提供や情報交換を実施した。 2015年と2017年において、達敏学校の現職教員10名程度を研修生として受け入れ、本校の教育課程や自閉症児の障害特性に応じた指導に関する講義を実施し、自閉症教育についても意見交換や授業実践についての協議を行った。

項目 / 学校名	締結相手（国名、機関名）	協定締結日	現締結期間	交流の分野	締結の目的	締結の経緯
附属久里浜特別支援学校	中華人民共和国 江蘇省蘇州工業園区 仁愛学校	2022.11.17	2022.11.17～2027.11.16	・教員間の教育実践研究	・日中間の文化交流を深め、両国の特別支援教育領域の促進を図るため。	・新型コロナウィルス感染拡大の影響により、交流活動は中断していたが、仁愛学校の唐妍教諭から交流を再開したいという連絡があった。仁愛学校の創立 10 周年を記念して、中国全土を対象として自閉症児交流会を開催するため、本校に日本の実践を紹介してほしいこと、仁愛学校の教員が本校研究会に参加したいことなどの要望を受けている。また、同校には、日本の大学院を修了した教員が在籍しており、今後の交流に向けての窓口や通訳として適任であり、連絡調整が円滑に進む利点がある。

締結・更新の記録

年　　度	学　校　名	新規／更新	相手校・機関
平成 21（2009）年度以前	附属中学校	新規	北京師範大学第二附属高校（中華人民共和国）
	附属高等学校	新規	〃
	附属駒場中・高等学校	新規	〃
	附属聴覚特別支援学校	新規	国立パリ聾学校（フランス共和国）
	附属大塚特別支援学校	新規	大邱大学校大邱保明学校（大韓民国）
	附属桐が丘特別支援学校	新規	三育再活学校（大韓民国）
平成 22（2010）年度	附属坂戸高等学校	新規	ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校（インドネシア共和国）
平成 23（2011）年度	附属中学校	更新	北京師範大学第二附属高校（中華人民共和国）
	附属高校	更新	〃
	附属駒場中・高等学校	更新	〃
	附属久里浜特別支援学校	新規	浙江省寧波市達敏学校（中華人民共和国）
平成 24（2012）年度	附属坂戸高等学校	新規	林業省附属林業教育センター（インドネシア共和国）
平成 26（2014）年度	附属桐が丘特別支援学校	更新	セロム学校（旧三育再活学校）（大韓民国）
	附属久里浜特別支援学校	新規	江蘇省蘇州工業園区仁愛学校（中華人民共和国）
平成 27（2015）年度	附属駒場中・高等学校	新規	国立台中第一高級中学（中華民国（台湾））
	附属坂戸高等学校	更新	ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校（インドネシア共和国）
	〃	新規	国立バダン第６高等学校（インドネシア共和国）
	附属聴覚特別支援学校	更新	国立パリ聾学校（フランス共和国）
	〃	新規	国立ソウル聾学校（大韓民国）
平成 28（2016）年度	附属小学校	新規	光州松源初等学校（大韓民国）
	附属坂戸高等学校	新規	フィリピン大学附属ルーラル高等学校（フィリピン共和国）
	附属桐が丘特別支援学校	新規	国立和美実験学校（台湾）
	〃	新規	国立南投特殊教育学校（台湾）
平成 29（2017）年度	附属坂戸高等学校	新規	カセサート大学附属高等学校（タイ）
	附属大塚特別支援学校	新規	チバガンティ特別支援学校（インドネシア共和国）
	附属桐が丘特別支援学校	更新	社会福祉法人 SRC 附属広州セロム学校（旧セロム学校）（大韓民国）
平成 30（2018）年度	附属聴覚特別支援学校	更新	国立ソウル聾学校（大韓民国）
令和元（2019）年度	附属視覚特別支援学校	新規	タイ視覚障害者支援クリスチャン財団及び財団管理下の盲学校、視覚障害関連教育・福祉施設（タイ）
令和 2（2020）年度	附属駒場中・高等学校	更新	台中市立第一高級中学（中華民国（台湾））
令和 3（2021）年度	附属聴覚特別支援学校	更新	国立パリ聾学校（フランス共和国）
令和 4（2022）年度	附属久里浜特別支援学校	更新	江蘇省蘇州工業園区仁愛学校（中華人民共和国）
	附属坂戸高等学校	更新	ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校（インドネシア共和国）
	〃	更新	カセサート大学附属高等学校（タイ）
	〃	更新手続き中	林業省附属林業教育センター（インドネシア共和国）

締結のメリット	協定締結後の構想			その他参考になること
	教員の交流方法	児童・生徒等の交流	その他	
・仁愛学校と本校は、2014 年から 2019 年まで国際交流協定を締結し、教員が相互に訪問して交流を重ねてきた。新型コロナウィルス感染拡大の影響により、交流活動は中断していたが、オンラインを活用し、授業研究会や研修会を実施することで、本校教員の専門性を高めながら、仁愛学校の自閉症教育の発展にも寄与できると考える。	・中国のリモートワークアプリケーション「DingTaik」を使用し、オンラインでの交流を進めている。仁愛学校における国際交流の窓口兼通訳である唐妍教諭と、双方の学校の現状や課題に関する情報交換を行い、今後の交流の方向性について検討を重ねた。試行的に翻訳機能を活用しながら、複数の教員間でやり取りしながら、教員間での活発な交流方法を模索中である。	・予定なし	・仁愛学校の創立 10 周年を記念して、中国全土を対象とした自閉症児研究会が開催された。「より良い生活に向けた自閉症児童教育の新たな探求（日本語訳）」のテーマのもと、オンラインで中国全土を対象とし、教職員が集まり、中国における自閉症教育への関心の高さが伺えた。仁愛学校から事例提供の依頼を受け、本校教諭が事例発表を行った。仁愛学校からも教職員が本校研究会に参加したい旨の要望があり、今後、双方の研究会への参加等を積極的に行い、双方の教育実践の理解を深めていきたい。	・2014 年から 2019 年まで、国際交流協定を締結し、現在に至る。 2014 には、二度にわたり本校教員が仁愛学校を訪問した。中国全土か約 50 名の教員を集めて開催された「日中自閉症教育シンポジウム」にも参加し、本校の教育課程等について発表した。 2016 年以降は、スカイプを利用した授業研究会を継続してきた。互いの授業に対して、双方の教師が具体的に協議をすることを通して、お互いの文化への関心や理解を深めながら、教育観の違いやその背景について知る貴重な機会となった。

（資料）報告書発行の記録

第１集（2007 ～ 2008 年度） 国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想に関わって～	2009 年２月発行
第２集（2009 ～ 2010 年度） 国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～	2011 年７月発行
第３集（2011 年度） 国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～	2012 年３月発行
第４集（2012 年度） 新たな国際教育の展開 ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～	2013 年３月発行
第５集（2013 年度） 附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～グローバル人材の育成を目指して～	2014 年３月発行
第６集（2014 年度） 附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～グローバル人材育成の充実を目指して～	2015 年３月発行
第７集（2015 年度） 附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～ダイバーシティ共生社会を創る人材育成の発展を目指して～	2016 年３月発行
第８集（2016 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2017 年３月発行
第９集（2017 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2018 年３月発行
第 10 集（2018 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2019 年３月発行
第 11 集（2019 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2020 年３月発行
第 12 集（2020 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2021 年３月発行
第 13 集（2021 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2022 年３月発行
第 14 集（2022 年度） 附属学校群の国際教育の推進	2023 年３月発行

令和４年度附属学校国際教育推進委員会名簿

委員長（教育長補佐）	梶　山　正　明	
副委員長（准教授）	飯　田　順　子	
教育長	溝　上　智恵子	
教育局次長	雷　坂　浩　之	
教育局・講師	木　村　範　子	
教育局・特任助教	久　保　尊　洋	
附属小学校校長	佐々木　昭　弘	
	荒　井　和　枝	附属小学校　教諭
	高　杉　達　也	附属中学校　教諭
	河　野　雅　昭	附属高等学校　教諭
	八　宮　孝　夫	附属駒場中・高等学校　教諭
	建　元　喜　寿	附属坂戸高等学校　教諭
	青　松　利　明	附属視覚特別支援学校　主幹教諭
	鎌　田　ルリ子	附属聴覚特別支援学校　主幹教諭
	森　澤　亮　介	附属大塚特別支援学校　教諭
	小　薗　慶　子	附属桐が丘特別支援学校　教諭
	石　川　千　尋	附属久里浜特別支援学校　教諭